HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	外国人多住地域の教育と国際交流活動：第1部 公立学校における外国人児童・生徒の教育と学校生活：第3章 日本人の親子から見た外国人の子ども
Author(s)	小内, 透
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 19, 19-49
Issue Date	2002-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/22641
Type	departmental bulletin paper
File Information	19_P19-49.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

第３章　日本人の親子から見た外国人の子ども

第１節　日本人児童・生徒の外国人児童・生徒との交流

われわれは、大泉町における小５、中２の日本人全員とその両親を対象に、1998年9月に外国人との交流にかかわるアンケート調査を、学校を通じた配布調査の形で実施した。調査票は親子ペアの分析ができるような形で設計した。調査結果は、表3-1に示されたとおりで、全体の有効回収数が532票、有効回収率が60.2%である。このうち、４つの小学校は７割弱から９割弱、３つの中学校が３割から５割の有効回収率となっている。

表3-1　対象者数・有効回収数・有効回収率　　単位：人、%

	A 小	B 小	C 小	D 小	E 中	F 中	G 中	合 計
対象者数	105	109	122	92	214	101	141	884
有効回収数	75	75	101	82	108	45	46	532
有効回収率	71.4	68.8	82.8	89.1	50.5	44.6	32.6	60.2

第１項　外国人の友人数

まず、表3-2から、外国人の友人数を見てみると、中２より小５、男子より女子の方が友人数の多い児童・生徒が目に付く。たとえば、外国人の友人がいないと答えた者の割合は、小５の男子が30.3%に対し、女子が15.3%、中２で男子が39.3%、女子が19.8%で、中２の男子が39.3%ともっとも多く、小５の女子が15.3%ともっとも少なくなっている。逆に、外国人の友人が５人以上いる者の割合は、中２の男子が最低（6.0%）、小５の女子が最高（16.9%）の数値を示している。明らかに、学年と性別によって、外国人の友人の数が大きく異なっていることが見てとれる。

表3-2　外国人の友人数別児童・生徒数（学年男女別）

			なし	1人	2人～	5人～	合計	日本人の友人数(平均)
実	小5	男	44	26	58	17	145	32.5
		女	27	33	87	30	177	36.1
	中2	男	33	6	40	5	84	48.1
		女	22	21	57	11	111	53.7
数	合計		126	86	242	63	517	40.1
構	小5	男	30.3	17.9	40.0	11.7	100.0	
		女	15.3	18.6	49.2	16.9	100.0	
成	中2	男	39.3	7.1	47.6	6.0	100.0	
		女	19.8	18.9	51.4	9.9	100.0	
比	合計		24.4	16.6	46.8	12.2	100.0	
日本人の友人数(平均)			22.2	31.8	42.3	75.6	63.9	

注）1.不明・無回答を除く。
　　2.単位＝人、%。
資料：実態調査より。

もちろん、こうした事実は、外国人の友人だけでなく、日本人も含めた友人数そのものの学年差や男女差を反映していると考えることもできる。そこで、日本人の友人数を見てみると、その傾向は、外国人の友人数のあり方とは必ずしも一致していない。日本人の友人数は、小５より中２の方が多くなり、同学年での男女差もそれほど大きくない。そのため、学年と性別による外国人の友人数の差は、友人関係一般の特徴ではなく、外国人を対象にした友人関係にのみ見いだされる特徴であることが理解できる。

表3-3　外国人の友人の性別

	男性	女性	両方	N
小5男	68.4	2.0	29.6	98
小5女	1.4	58.9	39.7	146
中2男	77.1	0.0	22.9	48
中2女	3.5	60.5	36.0	86
合計	28.8	37.0	34.1	378

注）単位＝人、%。

表3-4　外国人の友人数別児童・生徒数（学校別）　　単位：人、%

		なし	1人	2人～	5人～	合計	日本人の友人数(平均)	外国籍児童数	外国籍児童比率
実	A小	26	21	25	1	73	37.0	25	4.7
	B小	7	4	39	23	73	37.4	102	15.2
	C小	13	13	50	20	96	30.8	82	9.2
	D小	25	21	31	3	80	34.0	30	5.1
	E中	23	15	58	10	106	54.3	19	3.0
	F中	11	7	21	4	43	38.9	35	9.4
	G中	21	5	18	2	46	60.7	19	4.5
数	合計	126	86	242	63	517	40.1	312	7.6
構	A小	35.6	28.8	34.2	1.4	100.0			
	B小	9.6	5.5	53.4	31.5	100.0			
	C小	13.5	13.5	52.1	20.8	100.0			
	D小	31.3	26.3	38.8	3.8	100.0			
成	E中	21.7	14.2	54.7	9.4	100.0			
	F中	25.6	16.3	48.8	9.3	100.0			
	G中	45.7	10.9	39.1	4.3	100.0			
比	合計	24.4	16.6	46.8	12.2	100.0			

注）1.不明・無回答を除く。
2.外国籍児童数は各校の全学年の外国籍児童・生徒数（1998年10月現在）を示す。
3.外国籍児童比率は各校の全学年の児童・生徒数に占める割合を示す。
資料：実態調査および教育委員会資料より。

ただし、このことは、男子と比べ、女子が外国人の誰とでも友人になる傾向があることを意味していない。むしろ、女子も男子も同様に、同性の外国人と友人になるパターンが基本になっている（表3-3）。その意味で、どれだけ多くの外国人と友人になるのかという点では、男女間に少なからぬ違いがあるが、同性の外国人と友人になるという点では、男女とも共通している。

同時に、外国人の友人数は、彼らが通っている学校によっても異なっている。とりわけ小学校の場合、その傾向が強く、表3-4のように外国籍児童数やその割合が高い学校ほど外国人の友人数が多い者の割合が高くなっている。なかでも外国籍児童が102人（構成比＝15.2%）ともっとも多く在籍するB小学校とそれに次ぐC小学校では、5人以上の外国人の友人をもつ児童が、それぞれ31.5%、20.8%で、他の学校が10%未満であるのと比べ、飛び抜けて多くなっている。そのうえ、B小では、他のいずれの学校とも異なり、外国人の友人数に関する男女差もほとんど見られない（表3-5）。その背後には、これらの学校における外国籍児童の多さと同時に学校における教育実践や日常的な学校生活の違いが存在すると考えられる。

他方で、一般に友人関係に影響を与えると思われる、勉強やスポーツのでき、役職経験の有無は外国人の友人数に関してはほとんど無関係である（表3-6）。

したがって、ここから、第一に、日本人児童・生徒の外国人の友人数は、日本人同士の友人関係のあり方とは異なり、中学生より小学生、男子より女子の方が多くなること、第二に、とりわけ小学校の場合、外国籍の児童・生徒数の多い学校ほど外国人の友人の数が多くなる傾向があること、第三に、学校によっては外国人の友人の数に関して、男女差が見られない場合も存在することが明らかになる。こうした事実

表3-5　外国人の友人数別児童・生徒数（学校・男女別）

		なし	1人	2人～	5人～	合　計
A　小	男	50.0	29.4	17.6	2.9	34
	女	23.1	28.2	48.7	0.0	39
B　小	男	8.6	5.7	57.1	28.6	35
	女	10.5	5.3	50.0	34.2	38
C　小	男	23.3	11.6	51.2	14.0	43
	女	5.7	15.1	52.8	26.4	53
D　小	男	42.4	27.3	30.3	0.0	33
	女	23.4	25.5	44.7	6.4	47
E　中	男	23.1	7.7	61.5	7.7	39
	女	20.9	17.9	50.7	10.4	67
F　中	男	42.1	5.3	47.4	5.3	19
	女	12.5	25.0	50.0	12.5	24
G　中	男	61.5	7.7	26.9	3.8	26
	女	25.0	15.0	55.0	5.0	20
計	男	33.6	14.0	42.8	9.6	229
	女	17.0	18.8	50.0	14.2	288

注）単位＝人、%。

表3-6　勉強・スポーツ・役職経験

		勉強できる	スポーツ得意	役職経験あり	N
学年性別	小5男	83.3	74.0	46.0	126
	小5女	87.3	65.5	36.7	86
	中2男	65.9	71.4	45.6	242
	中2女	48.3	54.8	52.9	63
外国友人	いない	70.4	62.4	30.5	151
	1　人	71.1	57.6	46.8	182
	2人～	76.3	70.6	50.9	85
	5人～	77.0	75.4	37.5	114
学校別	A　小	89.3	68.9	50.0	75
	B　小	93.2	70.3	35.2	75
	C　小	81.2	67.3	33.7	101
	D　小	80.3	71.6	46.1	82
	E　中	53.8	58.5	48.0	108
	F　中	51.1	64.4	52.5	45
	G　中	65.2	67.4	51.2	46
合　計		74.4	66.6	44.2	532

注）1.勉強できる＝「できる」＋「まあまあできる」
スポーツ得意＝「得意」＋「まあまあ得意」
役職経験あり＝学級委員長、部活の部長、生徒会等の役員経験
2.単位＝人、%。

は、発達段階、性別、学校における外国籍児童の多さや教育実践の違いもまた、外国人の友人の数を左右する重要な要因となっていることを示唆している。

第2項　友人関係のきっかけと付き合い内容

それでは、こうした外国人との友人関係は、何をきっかけにして形成され、どのような内実をもつものとして存在しているのであろうか。

このうち、まず、外国人との友人関係を形成するきっかけについて、表3-7から見てみると、学年、男女、学校の違いなく、学校での出会い、とりわけクラスでの出会いがほとんどであることが明らかである。しかし、このことは、学校やクラスにしか外国人との出会いの機会が存在しないことを意味してはいない。表3-8のように、子ども会でも外国人との一定の接触機会があるからである。にもかかわらず、外国人との友人関係を取り結ぶきっかけとして子ども会があげられることは少なく、学校とりわけクラスに特化した形で外国人との友人関係を形成するきっかけが指摘されているのである。ここから、自分のクラスに外

表3-7　外国人の友だちとの出会い（学年性別・外国人の友人数別／複数回答）　　単位：人、％

		同クラスの友	部活動	その他学校内	習い事	ｽﾎﾟｰﾂ少年団	学習塾	子供会	近所	その他	N	M.T 計
学年性別	小５男	87.5	-	17.7	0.0	6.3	2.1	3.1	4.2	4.2	96	128.1
	小５女	89.8	-	12.9	1.4	1.4	0.7	5.4	6.1	4.1	147	126.5
	中２男	68.8	8.3	31.3	2.1	2.1	0.0	0.0	0.0	10.4	48	122.9
	中２女	85.4	20.7	15.9	0.0	0.0	1.2	1.2	7.3	4.9	82	136.6
外国友	１　人	87.7	7.4	4.9	0.0	1.2	1.2	1.2	2.5	2.5	81	108.6
	２人～	83.0	10.0	18.8	1.3	2.6	0.9	2.2	4.4	5.7	229	128.8
	５人～	92.1	3.2	27.0	0.0	3.2	1.6	9.5	11.1	6.3	63	154.0
学校別	A　小	84.8	6.5	21.7	0.0	0.0	2.2	0.0	4.3	2.2	46	121.7
	B　小	95.2	1.6	12.7	0.0	4.8	0.0	4.8	9.5	3.2	63	131.7
	C　小	91.5	3.7	11.0	0.0	2.4	1.2	4.9	3.7	4.9	82	123.2
	D　小	80.8	5.8	17.3	3.8	5.8	1.9	7.7	3.8	5.8	52	132.7
	E　中	76.9	20.5	25.6	0.0	1.3	0.0	0.0	3.8	7.7	78	135.9
	F　中	82.1	10.7	17.9	0.0	0.0	0.0	0.0	3.6	3.6	28	117.9
	G　中	83.3	8.3	12.5	4.2	0.0	4.2	4.2	8.3	8.3	24	133.3
合　計		85.5	8.3	17.2	0.8	2.4	1.1	3.2	5.1	5.1	373	128.7

注）外国人の友人がいない者、および無回答を除く。

表3-8　外国人の子どもとの接触機会（外国人のこどもはいるか）　　単位：人、％

		学習塾	ｽﾎﾟｰﾂ少年団	習い事	子供会	N
学年性別	小５男	10.6	19.2	2.0	31.8	151
	小５女	6.0	14.3	6.6	30.8	182
	中２男	4.7	4.7	1.2	20.0	85
	中２女	5.3	0.9	3.5	25.4	114
外国友人	いない	7.9	6.3	1.6	28.0	126
	１　人	3.5	14.0	4.7	20.9	86
	２人～	6.2	10.3	3.3	26.9	242
	５人～	14.3	22.2	9.5	42.9	63
学校別	A　小	10.7	10.7	1.3	29.3	75
	B　小	10.7	13.3	9.3	44.0	75
	C　小	6.9	14.9	3.0	30.7	101
	D　小	4.9	14.6	4.9	22.0	82
	E　中	6.5	2.8	2.8	25.0	108
	F　中	2.2	2.2	0.0	11.1	45
	G　中	4.4	2.2	4.3	30.4	46
合　計		7.0	11.3	3.8	28.2	532

国人が入ってくることが、外国人との友人関係を形成する上で、もっとも重要な意味をもっていることが理解できる。

にもかかわらず、学校やクラスでの出会いをきっかけにして形成される外国人との友人関係は、学校内にとどまる形をとっていない。むしろ、学年、男女、学校の違いなく、学校以外でのつきあいにまで確実に広がっている。とくに外国人の友人が多い者ほど学校外の付き合いも多くなる傾向が存在している（表3-9）。

これに対し、外国人との友人関係の内実を見ると、学年、男女、学校の違いが見られる。外国人との友人関係は、表3-10からわかるように、全体として、「外国語を教わる」「日本語を教える」「勉強を教える」が多く、「外国文化を教わる」「学校の規則を教える」がそれに次ぐ形になっている。しかし、いずれも、男より女、外国人の友人が多い者ほど多く、女子や外国人の友人の多い者の積極性がうかがえる。さらに、「教わる」者は基本的に小５より中２、「教える」者は逆が多いという学年差も見られる。明らかに、学年の上昇によって、外国人との友人関係の質が、「教える関係」から、「教わる関係」へと変化することが見いだせる。それは、学校に外国人児童・生徒がいて良い点に関する自由回答にも示されている。たとえば、「その国のいろいろな事を教えてくれたりするから楽しいし、その人達の習慣の違いがよ

表3-9　外国人の子どもとの学校外でのつきあい

		マンガの貸借	家に行き来	放課後遊ぶ	N
学年性別	小5男	10.6	25.8	18.5	151
	小5女	4.9	30.2	19.8	182
	中2男	18.8	34.1	17.6	85
	中2女	9.6	26.3	15.8	114
外国友人	いない	0.8	3.2	0.0	126
	1人	9.3	29.1	20.9	86
	2人～	14.0	37.2	23.1	242
	5人～	14.3	54.0	36.5	63
学校別	A小	2.7	20.0	10.7	75
	B小	13.3	40.0	29.3	75
	C小	9.9	28.7	25.7	101
	D小	3.7	24.4	9.8	82
	E中	17.6	30.6	21.3	108
	F中	13.3	26.7	17.8	45
	G中	4.3	30.4	4.3	46
合計		9.8	28.8	18.2	532

注）単位＝人、%。

表3-10　外国人の友だちと経験したこと　　単位：人、%

		外国語教わる	日本語教える	外国文化を教わる	日本文化を教える	学校の規則を教える	勉強を教わる	勉強を教える	N	M.T 計
学年性別	小5男	20.3	26.3	12.0	7.5	28.6	2.3	33.1	133	160.2
	小5女	43.5	43.5	21.8	9.4	27.6	4.7	48.8	170	218.2
	中2男	30.4	31.6	29.1	11.4	6.3	0.0	19.0	79	162.0
	中2女	52.8	36.8	38.7	12.3	10.4	0.9	25.5	106	199.1
外国友人	いない	17.6	19.4	13.0	4.6	11.1	0.0	16.7	108	136.1
	1人	27.5	21.3	17.5	7.5	13.8	3.8	28.8	80	147.5
	2人～	43.8	41.6	30.1	9.3	23.9	2.7	39.4	226	206.2
	5人～	58.7	61.9	33.3	25.4	34.9	4.8	58.7	63	282.5
学校別	A小	38.6	32.9	11.4	4.3	25.7	1.4	25.7	70	172.9
	B小	40.6	50.7	30.4	14.5	31.9	1.4	63.8	69	244.9
	C小	27.7	40.4	11.7	8.5	35.1	6.4	43.6	94	195.7
	D小	28.6	18.6	18.6	7.1	17.1	4.3	34.3	70	157.1
	E中	43.0	35.0	40.0	16.0	10.0	1.0	24.0	100	199.0
	F中	38.1	40.5	23.8	9.5	11.9	0.0	28.6	42	178.6
	G中	48.8	27.9	32.6	4.7	2.3	0.0	14.0	43	151.2
合計		37.1	35.5	24.0	9.8	20.7	2.5	34.6	488	189.1

くわかっていい」（E中・女子・外国人の友人２人～）、「異国の文化が学ぶことができるし、外国語を教えてもらえる」（G中・女子・外国人の友人２人～）のように、外国の言葉や文化を学べる点をあげる者が全体として多く、小５より中２、男子より女子にその傾向が強い（表3-11）。

こうして、小学校段階では、友人としての外国人児童が学校や学校的価値に適応するのに役立つような働きかけを行っているのに対し、中学校段階では、自らが異文化に接する点に友人関係の意義を見出そうとしている姿が垣間見られる。

ただし、この中にあって、B小の５年生には、他の学校の児童・生徒とは異なる傾向が存在している。表3-12のように、教わったり教えたりした経験のない者（11.6%）や「教わる」経験しかない者（2.9%）がほとんどおらず、各校の中でもっとも少ない。逆に、「教える」経験のみをもっている者（40.6%）が多く、その上、「教わる」経験、「教える」経験のいずれももっている者が44.9%と、すべての学校の中でもっとも多くなっている。そのため、B校の場合、全体として、80%以上の者が「教える」経験をもち、そのうち半分は「教わる」経験も同時にもっていることになる。この点で、B小では、他の学校の児童・生徒とは異なり、外国人との友人関係は「教える関係」だけでなく、「教わる関係」もあわせもつパターンが多いという特徴が見いだせる。ただし、両方の経験をもつ者の割合は男女間で差異があり、

表3-11　学校に外国人生徒がいて良い点（自由回答の類型化）　　単位：人、％

		外国の言葉や文化を学べる	国際交流ができる	楽しく明るくなる	友達が増える	その他	とくになし	わからない	無回答	N
学年性別	小5男	17.2	2.6	5.3	8.6	7.9	23.8	4.6	31.1	151
	小5女	30.2	6.6	7.1	13.2	12.1	15.9	0.5	19.8	182
	中2男	34.1	8.2	4.7	8.2	10.6	27.1	0.0	10.6	85
	中2女	50.9	7.0	7.9	8.8	6.1	14.0	1.8	10.5	114
外国友人	いない	18.3	7.1	7.1	4.8	10.3	26.2	4.0	26.2	126
	1人	32.6	4.7	5.8	14.0	4.7	24.4	1.2	16.3	86
	2人～	37.6	5.8	5.8	10.7	9.5	15.7	1.2	18.2	242
	5人～	38.1	4.8	9.5	15.9	12.7	14.3	0.0	11.1	63
学校別	A小	30.7	5.3	6.7	8.0	9.3	17.3	4.0	21.3	75
	B小	28.0	5.3	4.0	9.3	18.7	18.7	0.0	21.3	75
	C小	19.8	4.0	7.9	10.9	5.0	25.7	3.0	23.8	101
	D小	20.7	4.9	6.1	15.9	9.8	14.6	2.4	32.9	82
	E中	40.7	6.5	7.4	9.3	8.3	25.9	0.9	8.3	108
	F中	44.4	6.7	8.9	2.2	4.4	15.6	0.0	20.0	45
	G中	50.0	10.9	2.2	13.0	10.9	8.7	2.2	6.5	46
全体		31.6	5.8	6.4	10.2	9.4	19.5	1.9	19.5	532

注）ここでの数値は自由回答を類型化し、各類型に該当するケースのNに対する割合を示している。自由回答の中には、複数の内容が含まれるため、合計は100％をこえる。

表3-12　外国人の友だちと経験したこと　単位：人、％

		教わるのみ	教えるのみ	両方	未経験	N
学年性別	小5男	10.5	42.1	17.3	30.1	133
	小5女	8.8	30.0	42.4	18.8	170
	中2男	24.1	16.5	25.3	34.2	79
	中2女	24.5	16.0	37.7	21.7	106
外国友人	いない	10.2	22.2	13.9	53.7	108
	1人	18.8	32.5	21.3	27.5	80
	2人～	17.7	28.8	38.1	15.5	226
	5人～	9.5	30.2	55.6	4.8	63
学校別	A小	11.4	21.4	34.3	32.9	70
	B小	2.9	40.6	44.9	11.6	69
	C小	8.5	41.5	27.7	22.3	94
	D小	15.7	35.7	20.0	28.6	70
	E中	24.0	10.0	36.0	30.0	100
	F中	14.3	26.2	33.3	26.2	42
	G中	34.9	20.9	23.3	20.9	43
合計		15.2	28.1	31.8	25.0	488

注）1.不明・無回答を除く。
2.教わる＝外国人の友人から「外国語」「外国文化」「勉強」のいずれかを教わった経験がある
教える＝外国人の友人に「日本語」「日本文化」「勉強」「学校の規則」のいずれかを教えた経験がある
両方＝教わった経験も＋教えた経験もある
未経験＝教わった経験も教えた経験もない

女子（58.3％）の方が男子（30.3％）よりも大きく、この点では、他の学校と同じ傾向を示している。

こうして、外国人との友人関係の内実にも、男女差、学年差、学校差があることが明らかになる。

第3項　友人と経験したいこと

さらに、今後友人と経験したいことについて表3-13からみてみると、全体として、現実の友人付き合いと同様、「外国語を教わる」「外国文化を教わる」「日本語を教える」が多くなっている。しかも、男より女、外国人の友人が多い者ほどこれらの項目をあげる傾向が強く、この点でも、現実の友人づきあいと共通した内容になっている。

表3-13　外国人の友だちと経験したいこと　　単位：人、％

		外国語教わる	日本語教える	外国文化を教わる	日本文化を教える	学校の規則を教える	勉強を教わる	勉強を教える	つきあいたくない	N	M.T 計
学年性別	小5男	37.2	14.6	16.1	6.6	16.8	2.9	13.9	13.9	137	133.6
	小5女	53.7	27.1	34.5	16.9	17.5	5.1	28.2	8.5	177	201.1
	中2男	35.4	11.4	30.4	19.0	7.6	2.5	5.1	16.5	79	143.0
	中2女	50.0	22.2	40.7	20.4	9.3	7.4	9.3	11.1	108	176.9
外国友人	いない	32.5	13.2	23.7	11.4	11.4	2.6	7.9	27.2	114	140.4
	1人	43.4	13.3	20.5	13.3	16.9	7.2	12.0	6.0	83	144.6
	2人～	51.1	21.2	35.1	15.2	9.5	4.3	19.5	7.4	231	174.5
	5人～	56.5	38.7	41.9	25.8	25.8	6.5	29.0	6.5	62	233.9
学校別	A小	50.0	15.3	36.1	11.1	9.7	4.2	18.1	4.2	72	155.6
	B小	47.9	38.0	26.8	19.7	18.3	2.8	42.3	16.9	71	218.3
	C小	38.8	16.3	19.4	10.2	22.4	6.1	13.3	14.3	98	156.1
	D小	52.1	19.2	26.0	9.6	16.4	2.7	17.8	6.8	73	163.0
	E中	47.1	19.6	36.3	22.5	4.9	3.9	7.8	12.7	102	165.7
	F中	35.7	11.9	26.2	4.8	16.7	4.8	9.5	11.9	42	135.7
	G中	44.2	18.6	46.5	27.9	9.3	9.3	4.7	16.3	43	181.4
合計		45.5	20.2	30.1	15.2	14.0	4.6	16.6	11.8	501	168.3

表3-14　外国人の友だちとの経験と経験したいこと（B小）　　単位：人、％

		外国語教わる	日本語教える	外国文化を教わる	日本文化を教える	学校の規則を教える	勉強を教わる	勉強を教える	つきあいたくない	N	M.T 計
実数	教わった経験のみ	1	0	0	1	0	0	0	0	2	2
	教えた経験のみ	5	7	4	2	4	1	10	6	27	40
	両方の経験	26	19	14	11	9	1	19	3	31	102
	経験なし	1	1	1	0	0	0	1	1	8	8
構成比	教わった経験のみ	50.0	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	100.0
	教えた経験のみ	18.5	25.9	14.8	7.4	14.8	3.7	37.0	22.2	100.0	148.1
	両方の経験	83.9	61.3	45.2	35.5	29.0	3.2	61.3	9.7	100.0	329.0
	経験なし	12.5	12.5	12.5	0.0	0.0	0.0	12.5	12.5	100.0	100.0

しかし、現実の友人づきあいの内実とは異なり、今後友人と経験したいことに関しては学年差が縮まり、現実の友人づきあいの中で、全体として多くの者があげていた「勉強を教える」「学校の規則を教える」をあげる者は減少している。ここから、学年の違いなく、学校や学校的価値に適応するために友人に働きかけようとする志向性は、現実よりも低下することがうかがえる。

その中にあって、B小だけは「日本語を教える」、「勉強を教える」をあげる者も多く、中学校を含めた全校の中で特異な姿を示している。しかし、これは「教えた」経験のない者が今後「教える」ということではない。むしろ、表3-14のように、「教わる」経験と「教える」経験のいずれももっている者に、「日本語を教える」、「勉強を教える」が目立って多くなっている。したがって、こうした友人関係を持つ者の場合、今後も「教え」「教わる」関係を維持する傾向が強いことを物語っている。したがって、「教え」「教わる」という友人関係をもつことは、今後の友人関係を維持する上でもきわめて重要な意義をもっていると考えることができる。

第4項　小　括

以上、日本人児童・生徒の外国人児童・生徒との交流について、友人関係の側面からその実態を見てきた。その結果、明らかになったことをまとめると、以下のごとくなろう。

まず第一に、日本人児童・生徒の外国人児童・生徒との友人関係の形成に関して、学校のあり方がきわめて重要な意義をもっていた。それは、なによりもまず、学校、学年、性別を問わず、外国人児童・生徒との友人関係のきっかけが学校、とりわけクラスでの出会いにあったこと、しかも、学校やクラスでの出会いをきっかけにして形成された友人とのつきあいは学校以外の場面でも維持されていた点に示されている。そのため、どの学校も学校ないしクラスという場そのものが、日本人児童・生徒が外国人児童・生徒

との友人関係を作り上げていく上で、重要な場として意味をもっていることが明らかになった。

だが第二に、外国人の友人の数や付き合い内容などの点では、むしろ学校による差が見出された。とりわけ、B小における外国人児童・生徒との友人関係の広がりや双方向的な付き合いの内実は、他の学校では見出すことができない特徴を示していた。それだけ、学校による違いが大きいということである。それは、一方で、B小の場合、外国人児童・生徒の絶対数と生徒総数に占める割合がともに際だっていたこと、他方で、B小での外国人児童・生徒に対する学校の取り組みや国際理解教育といった教育実践のあり方と深く関連していると考えられる。そもそも、一定の外国人児童・生徒が存在しなければ友人関係はできないが、学校の有効な教育実践がなければ、外国人児童・生徒の多さがむしろ学校に混乱を起こすだけになりかねないからである。

第三に、外国人児童・生徒との交流のあり方には、明確な男女差が見いだせた。それは、外国人児童・生徒との交流に積極的な女子と必ずしもそうでない男子という違いとして把握できた。たしかに、外国籍児童が多いB小では、外国人の友人数に関してだけは、男子と女子の違いはほとんど見出されなかった。しかし、それ以外の点では、B小を含めて、学年の違いや学校の違いにかかわらず、外国人児童・生徒との友人関係に関して、女子の積極性と男子の消極性がほぼ一貫して存在していた。

第四に、学年による差も明確に存在した。とりわけ特徴的なことは、外国人の友人との付き合いの内実が異なっていたことである。小学生は彼らに日本語や日本文化、学校の規則などを「教える」ことが多く、中学生は外国人の母国語や母国の文化などを「教わる」ことが中心であった。B小のように、女子を中心に小学生でありながら「教える」関係だけでなく、「教わる」関係を友人との間にもつ者が多い学校もあった。しかし、それ以外では、「教える」小学生と「教わる」中学生という姿が一般的であった。一般に考えると、知識が豊富になる中学生の方が小学生より「教える」傾向が強くなっても不思議ではない。しかし、現実はそうなっていないのである。それは、小学生は身近な友達に「世話」をやくことが友人との付き合いの内実となるのに対し、中学生は自らの知識や視野を広めることに友人関係の意味を見出していることを示しているのかもしれない。したがって、この点に友人付き合いの内実の学年差がもつより本質的な意味が存在すると考えられる。

第２節　日本人児童・生徒の外国人児童・生徒との交流に関する意識

第１項　外国人の存在がもたらす影響に関する意識

それでは、以上のような外国人との友人関係をもつ日本人児童・生徒たちは、外国人の存在に対してどのような意識をもっているのであろうか。それを、いくつかの点から検討してみよう。

まずはじめに、学校の中に外国人がいることがどのような影響をもたらすのかという点から見ていこう。

表3-15は、この点について、まとめたものである。これを見ると、「気にならない」「世界に興味が広がる」が学年・男女・学校差なく多く、逆に、「自分が日本人と感じる」「勉強が遅れる」は学年・男女・学校差なく少ないことがわかる。また、外国人の友人が多い方が「世界に興味が広がる」が多い傾向があるが、それ以外は外国人の友人数の違いはそれほど大きな意味をもたない。ここから、外国人が学校にいても、「気にならず」、とりたてて「自分が日本人と感じる」こともなく、外国人のせいで「勉強が遅れる」と感じることもない、むしろ外国人がいることで「世界に興味が広がる」――これが、日本人児童・生徒の一般的なイメージとして描ける。(補注)

（補注）ただし、「世界に興味が広がる」という意識は、必ずしもブラジルやポルトガル語に対する興味から生じているわけではない。外国人として日常接しているのはブラジル人であるにもかかわらず、彼らの外国への興味は欧米志向の強いものになっている。

たとえば、表3-16のように、外国語や外国への志向性は「英語を話せるようになりたい」が圧倒的で、「ポルトガル語を話せるようになりたい」「留学したい」「海外で暮らしたい」は3、4割程度である。このうち、「ポルトガル語を話せるようになりたい」は小５の方がどの学校でも多く、「英語」「留

表3-15　外国人が存在する影響に関しての児童・生徒の意識　　単位：人、％

		世界の国に興味が広がる	外国人のせいで勉強遅れる	自分が日本人と強く感じる	友達外国人でも気にならず	N
学年性別	小５男	45.0	6.0	37.7	68.9	151
	小５女	54.9	4.9	28.0	54.9	182
	中２男	55.3	4.7	24.7	61.2	85
	中２女	46.5	0.9	28.1	71.1	114
外国友人	いない	37.3	6.3	31.7	53.2	126
	１　人	45.3	2.3	26.7	61.6	86
	２人～	55.8	4.1	29.3	69.0	242
	５人～	63.5	4.8	33.3	65.1	63
学校別	Ａ　小	49.3	5.3	26.7	60.0	75
	Ｂ　小	56.0	9.3	33.3	64.0	75
	Ｃ　小	49.5	4.0	40.6	58.4	101
	Ｄ　小	47.6	3.7	26.8	63.4	82
	Ｅ　中	53.7	0.0	25.0	75.9	108
	Ｆ　中	37.8	4.4	33.3	51.1	45
	Ｇ　中	54.3	6.5	23.9	60.9	46
合　計		50.4	4.3	30.3	63.3	532

注）ここでの数値は各項目に関して「そう思う」「まあまあそう思う」と答えた者の割合。

表3-16　外国語や外国に対する志向性　　単位：人、％

		英語話せるようになりたい	ﾎﾟﾙﾄｶﾞﾙ語話せるように	外国に留学したい	外国で暮らしてみたい	N
学年性別	小５男	72.8	39.1	19.9	16.6	151
	小５女	77.5	51.1	34.1	28.0	182
	中２男	80.0	34.1	40.0	41.2	85
	中２女	86.0	39.5	53.5	47.4	114
外国友人	いない	72.2	26.2	27.8	24.6	126
	１　人	76.7	44.2	25.6	24.4	86
	２人～	81.4	46.3	40.5	36.4	242
	５人～	84.1	58.7	46.0	36.5	63
学校別	Ａ　小	81.3	48.0	25.3	22.7	75
	Ｂ　小	74.7	46.7	37.3	32.0	75
	Ｃ　小	69.3	41.6	22.8	13.9	101
	Ｄ　小	78.0	47.6	26.8	25.6	82
	Ｅ　中	85.2	40.7	46.3	46.3	108
	Ｆ　中	82.2	37.8	53.3	51.1	45
	Ｇ　中	80.4	28.3	45.7	34.8	46
合　計		78.4	42.5	35.2	31.0	532

注）ここでの数値は各項目に関して「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた者の割合。

学」「海外生活」は小５より中２、男より女、友人の多い方が高い割合になっている。ただし、「留学」や「海外生活」を望む国はアメリカやヨーロッパが多く、「ブラジル」をあげる者はほとんどいない。したがって、現実の学校では日系ブラジル人が中心的な外国人であるにもかかわらず、その影響は「ポルトガル語を話せるようになりたい」のみに見られ、それも小学校に限定されているといえる。

そのため、日本人児童・生徒たちの欧米志向の強さと、ブラジル人との現実的な交流との間には基本的なズレがあると見なせる。

また、「日本で日本の事を学ぶというところが偉い（よい）と思う。日本の学校にがんばってとけ込めるようにしている所（が偉い）」（Ｄ小・女子・外国人の友人不明）のように、外国人児童・生徒自身の

姿勢を評価したり、「外国人がいた方が休み時間でサッカーとかをやるのにおもしろい」（C小・男子・外国人の友人２人～）といった点に遊び相手としての独自性を見出す者もいる。さらに、外国人児童・生徒がいて良い点として、「あとから来た外国人に通訳してくれる」（B小・男子・外国人の友人なし）ことをあげる児童もいる。こうして、外国人が学校にいることが、自らにとって少なくともマイナスの影響をもたらしておらず、むしろ世界に興味をもつきっかけとして受けとめられていることが推察される。

ここからは、子どもたちの場合、外国人を「怖い」存在、「かわいそうな」存在として見たり、日本人としての民族意識や自民族中心主義が強化されがちになったりするといった姿は見いだせない。それだけ、外国人を「自然体」で受けとめているといえる。「私は日本人だとか外国人だとか区別したことがないので、外国人の友達とも仲良く遊んでいるので、困ったことはありません。」（C小・女子・外国人の友人１人）という言葉は、それを象徴している。

しかし、このことは、日本人児童・生徒たちが外国人児童・生徒を「ありのまま」受け入れていることを意味してはいない。外国人児童・生徒に対して、様々な要望をもっているし、彼らの文化に対し許容できない姿勢をもつこともある。

第２項　外国人に対する要望

実際、外国人児童・生徒に望むことを、表3-17から見てみると、圧倒的に言語の問題に集中する。全体として、一方で、「母国語使用は当然」と認める者が多いが、他方で、「日本語を習うべき」とする者も多い。しかも、同一の児童・生徒が両方あげる場合も少なくない。したがって、このような現実は、外国人が「母国語を使用するのは当然」だが、きちんと「日本語も習うべき」だという意識が子どもたちに広く存在していることを物語っている。

表3-17　外国人に対する児童・生徒の要望

		外国人も日本語を使うべき	外国人の母国語使用は当然	外国人母国語習った方よい	外国人外国人学校通うべき	N
学年性別	小５男	56.3	56.3	33.1	7.3	151
	小５女	58.2	65.9	23.6	12.6	182
	中２男	49.4	71.8	36.5	12.9	85
	中２女	42.1	72.8	19.3	11.4	114
外国友人	いない	55.6	65.1	29.4	19.0	126
	１　人	51.2	60.5	12.8	8.1	86
	２人～	54.5	66.9	27.7	8.3	242
	５人～	44.4	71.4	39.7	9.5	63
学校別	A　小	48.0	66.7	34.7	5.3	75
	B　小	64.0	56.0	29.3	9.3	75
	C　小	66.3	57.4	22.8	12.9	101
	D　小	48.8	67.1	26.8	12.2	82
	E　中	43.5	72.2	25.0	11.1	108
	F　中	53.3	64.4	26.7	17.8	45
	G　中	41.3	80.4	30.4	8.7	46
合　計		52.8	65.6	27.4	10.9	532

注）1.ここでの数値は各項目に関して「そう思う」「まあまあそう思う」と答えた者の割合。
2.単位＝人、%。

しかし、これらの結果は、男女差は見られないものの、学年や学校によって異なっている。「日本語を習うべき」は中２より小５の方が多く、外国人の多いB小やC小でとくに多く見られる。B小、C小ではそれぞれ60%を超える児童が外国人児童は「日本語を習うべき」だと考えており、もっとも少ないG中（41.3%）、E中（43.5%）と比べ20%以上の差になっている。ちなみに、G中、E中は実数、構成比とも外国人生徒がもっとも少ない学校である。これとは反対に、「母国語使用は当然」は、小５より中２の方が多く、B小、C小で最低（56.0%、57.4%）になっている。しかも、ここでもまた、G中（80.4%）、

E中（72.2%）がB小、C小と対照的に高い割合を示している。

しかし、この結果は、B小やC小の日本人児童に同化志向の強い者が多いことを単純に意味しているわけではない。むしろ、外国人の数や構成比の高いこれらの学校では、必ずしも同化の志向性からではなく、外国人との交流の必要性や志向性の高さから外国人の日本語使用を望む者が多いと考えた方が現実に近い。それは、一方で、B小やC小では外国人の友人をもつ者が多く、他方で、「日本語も伝わらなくて、何をしても相手がわからない時。しょうがないけれどちょっと困る」（B小・女子・外国人の友人2人～）、「特に男はケンカなどをするとポルトガル語を話したり、私達が言っていることを聞こえないふりをするところ」（C小・女子・外国人の友人5人～）といった言葉からもうかがえる。逆にいえば、G中、E中のような実態は、異文化の尊重の結果というより、交流の必要性や要求がそれほど高くないことに基づいていると考えることができる。したがって、いずれの場合にも、言語に対する考え方は、文化的な同化や差異の尊重という視点ではなく、交流やコミュニケーションの手段という視点から理解されていることが明らかになる。

第3項　外国人の「文化的差異」に対する許容意識

これに対し、言語以外のピアスの使用、学校での掃除、学校へ通うこと、給食のあり方といった日本人とは異なる習慣＝外国人の「文化的差異」に関しては、表3-18からわかるように、全体として日本人児童・生徒の許容度は低くなる。

表3-18　外国人児童・生徒の行動に対する許容意識

		ピアスをつけてもよい	掃除をしなくてよい	学校へ来なくてよい	給食は別献立にした方よい	N
学年性別	小5男	24.5	2.0	5.3	2.6	151
	小5女	37.9	0.0	6.0	1.6	182
	中2男	25.9	1.2	12.9	3.5	85
	中2女	41.2	1.8	21.1	0.9	114
外国友人	いない	30.8	3.3	14.2	5.0	126
	1　人	32.1	0.0	7.3	0.0	86
	2人～	37.2	0.4	11.3	2.1	242
	5人～	32.3	1.6	4.8	0.0	63
学校別	A　小	40.0	1.3	8.0	2.7	75
	B　小	29.3	1.3	5.3	2.7	75
	C　小	22.8	0.0	5.0	1.0	101
	D　小	37.8	1.2	4.9	2.4	82
	E　中	33.3	1.9	13.9	0.0	108
	F　中	24.4	2.2	28.9	4.4	45
	G　中	47.8	0.0	15.2	4.3	46
合　計		32.9	1.1	10.2	2.1	532

注）単位＝人、%。

しかし、この点も、必ずしも外国人の「文化的差異」を正面から否定し、同化を望んでいることを意味していない。むしろ、それは、「日本の学校の規則を守らない」（F中・女子・外国人の友人1人）、「ピアスなど、規則を守らないことが多すぎる」（E中・女子・外国人の友人なし）という表現に代表されるように、「学校では同じルールを守るべきだ」という意識から生み出されていると考えた方が現実に近い（表3-19参照）。いいかえれば、それは、学校で認められていないことが外国人にだけ認められるのは納得できないという特別扱いに対する敏感な意識とも重なり合う。事実、「（外国人の生徒は）ピアスをつけてる。……みんなが規則を守ってるのに守ってない。……はっきり言ってムカツク」（F中・女子・外国人の友人2人～）、「外国人に対して注意をしない（髪の毛のゴム、ピアス）。差別だ」（E中・女子・外国人の友人5人～）、「外国人だといって学校のきまりを守らなくても先生にあまり注意されない」（E中・女子・外国人の友人2人～）という意見が中学生の女子を中心に出されている。

表3-19　学校に外国人生徒がいて困る点（自由回答の類型化）　　単位：人、％

		言葉が通じない	乱暴、悪口を外国語で言う	外国人が固まる	習慣や服装が違う	ルールを守らない	外国人は嫌い	その他	なし	わからない	無回答	N
学年性別	小５男	19.2	2.0	0.0	2.6	14.6	0.0	2.0	31.1	2.6	27.2	151
	小５女	29.7	10.4	6.6	2.2	6.6	1.6	1.6	26.9	1.1	17.6	182
	中２男	28.2	0.0	0.0	4.7	8.2	0.0	0.0	50.6	0.0	9.4	85
	中２女	36.0	1.8	6.1	10.5	10.5	1.8	6.1	29.8	1.8	7.9	114
外国友人	いない	21.4	1.6	1.6	4.8	10.3	0.8	0.8	34.1	3.2	24.6	126
	１　人	26.7	5.8	2.3	2.3	9.3	2.3	0.0	44.2	0.0	14.0	86
	２人～	31.4	3.7	4.1	4.5	9.9	0.4	3.3	30.6	1.7	14.0	242
	５人～	31.7	12.7	7.9	6.3	11.1	0.0	4.8	19.0	0.0	14.3	63
学校別	A　小	36.0	1.3	0.0	2.7	5.3	1.3	0.0	41.3	1.3	10.7	75
	B　小	29.3	6.7	6.7	5.3	14.7	1.3	1.3	25.3	1.3	16.0	75
	C　小	20.8	11.9	1.0	2.0	16.8	0.0	2.0	20.8	2.0	25.7	101
	D　小	15.9	4.9	7.3	0.0	2.4	1.2	3.7	30.5	2.4	32.9	82
	E　中	28.7	0.9	4.6	7.4	4.6	1.9	2.8	50.0	0.9	5.6	108
	F　中	33.3	2.2	4.4	15.6	20.0	0.0	8.9	15.6	0.0	15.6	45
	G　中	41.3	0.0	0.0	2.2	10.9	0.0	0.0	34.8	2.2	8.7	46
全体		27.8	4.5	3.6	4.5	10.0	0.9	2.4	32.5	1.5	16.9	532

注）ここでの数値は自由回答を類型化し、各類型に該当するケースのNに対する割合を示している。自由回答の中には、複数の内容が含まれるため、合計は100％をこえる。

したがって、逆にいえば、自らも納得できないルールであれば、それを根拠にして外国人の「文化的差異」を許容する結果を生み出す可能性もある。

それは、ピアスや学校に通うことに関する意識にかいま見ることができる。ピアスについては他の項目と異なり、やや許容度が高く、とくに女子やG中に多いという特徴がある。これは、たんに外国人の文化に対する許容度の高さを示すものではなく、日本人や自らに対してもピアスを認めてほしいという意識のあらわれなのかもしれない。実際、「ピアスは日本人のコだって平気でやってるから別にいい」（E中・女子・外国人の友人なし）という声もある。また、外国人が日本の学校へ通うべきかどうかに関しても、中２で通う必要はないという考えをもつ者がやや増加する。学校別に見ると、F中にこの傾向が強い。これも、外国人の問題としてだけでなく、「日本人も」必ずしも学校へ行く必要はないという考え方が一定の影響を与えていると考えられる。

したがって、外国人の「文化的差異」に対する全体的な許容度の低さは、結果的に同化主義的な現象を生み出すにしても、もともと同化的な志向性の強さから生み出されるのではなく、自らが納得しているかどうか別にして、現実に存在する学校でのルールに、自らと同様に従うべきだという意識に由来すると見なすことができる。

第４項　小　括

以上、日本人児童・生徒の外国人児童・生徒との交流に関する意識について、いくつかの側面から検討してきた。

その結果、まず第一に、国際化の傾向の中で外国人自体を否定する意識は弱いことが浮き彫りになった。それは、日本人児童・生徒たちが外国人児童・生徒たちを「自然体」でうけとめている点に示されていた。その背後に、「世界に対する興味」の広がりが存在していた。

しかし、第二に、外国人の「文化的差異」に対する許容度は必ずしも高くなかった。ただし、それは、異文化を否定するというよりも、「学校」では同じルールを守るべきだという意識の現れであり、外国人だけ特別扱いするのは、認められないという考え方に由来するものであった。

第三に、外国人の多い小学校に多かった「日本語を習うべきだ」とする主張も、決して外国人の「文化」を否定する考え方にもとづくものではなかった。なぜなら、「日本語を習うべきだ」とする者の中にも「母国語を使ってもよい」とする考え方が少なからず存在したからである。そこでは、むしろ、「日本

語を習うべきだ」とする主張は、同化—差異の尊重という視点ではなく、交流やコミュニケーションの手段の確保という視点から提示されているものとして理解する方が現実的である。

ただし、第四に、学校の中に英語圏の児童・生徒が多ければ事情は変化する可能性もありうる。なぜなら、外国語や外国に対する志向性からもわかるように、日本人児童・生徒の中に、根強い欧米志向があるからである。したがって、もしかりに、英語圏の子どもたちが学校に多く存在したならば、日本語を習うべきだという主張はより少なくなり、外国人と交流する者の割合もより高くなる可能性がある。その意味では、この点に、日系ブラジル人を中心とした外国人児童・生徒との交流の現実と意識の間にある一定の齟齬が存在すると考えられる。

第3節　子どもの交流に与える親の影響

第1項　大泉町における外国人と日本人の関係

日本人児童・生徒の外国人児童・生徒との交流を考える際、日本人の親が与える影響を考える必要がある。一般に、子どもの行動や意識は、親の行動や意識から少なからぬ影響を受けるからであり、より特殊には、大泉町の場合、すでに述べたように、地域社会レベル、つまり「大人」のレベルでは、日系ブラジル人と日本人の間にセグリゲート化された関係が生まれつつあるからである。

事実、「大泉町に多くの外国人がいることについて、日頃どのように感じていますか」という問いに対する自由記述にも、以下のようなものがある。

「日本で一番外国人が多いなどブラジルの町とかテレビなどで放送されますが、ほとんどの人が交流がないし、町の中に別のグループが固まっているといった印象です。日本人でも外国人でも社会的責任などきちんと守ってくれれば仲良く共存できると思っている」（A小・男子・外国人の友人1人／母）、「大泉町で外国人とはブラジル人であり、現状は『むら』社会の様になっている。町民には排他的意識が強く、彼等も日本人との協調は望んでいない様である。互いに不幸にならないか心配である」（E中・女子・外国人の友人なし／親）。

もちろん、「これからは国際化の時代なのでクラスに外国人がいるのは良いことだと思います。色々の国と知りあえたらと思います」（B小・男子・外国人の友人なし／父）、「皆同一が良いと考えがちな日本人にとって、いろいろな人種の人がいるという事が身近で体験できるのは良いと思う」（E中・女子・外国人の友人1人／父）というように、外国人が多く居住している点を積極的に捉える意見もある。また、たとえセグリゲート化が進んでも、「平和共存」の状態になれば、それほど問題はないという見方も成り立つ(1)。

しかし、実際には、こうしたセグリゲート化が、けっして「平和共存」の状態をもたらさず、様々な問題が生み出されていると感じる住民がいることも事実である。それは、表3-20、表3-21のように、「ルールを守らない」「治安が乱れる、こわい」という二つの主旨の意見が自由記述の中に比較的多くあげられている点に示されている。この設問は自由回答のため、父母ともに無回答が多いが、父親の11.7%、母親の16.5%が「ルールを守らない」点を指摘し、父親の9.9%、母親の21.3%が「治安が乱れる、こわい」という主旨の意見を述べている。

このうち、「ルールを守らない」という主旨の意見は、交通ルール、ゴミ出しのルール、騒音に関するルール、税金に関わるルールなど多岐にわたる。

交通ルールについては、「文化の違いがあり、又、交通ルールの違いもあるため、車を運転していても危ない。免許は日本で取らせるべき。無保険車も多いと聞く」（F中・男子・外国人の友人なし／父）などのように無保険の問題も含まれ、ゴミ出しのルールに関しては「ゴミを出す日を守らない。何回注意してもわかってくれない」（B小・女子・外国人の友人5人～／父）と嘆く者がいる。「ストレスを感じることが多い。音楽のボリュームを最大にし、窓を全開にし、何時間もかけていたり、夜中、我が家の庭に車を乗り入れ、エンジンをかけたまま車の外で大きな声で話をしていたり、細かいことを言ったら、まだまだたくさんある」（B小・男子・外国人の友人2人～／母）と騒音等に悩まされ、「……出産の時だけ

表3-20　大泉町に外国人がいることに関する父の意見（自由回答の類型化）　単位：人、％

		良い点			困る点					
		外国の言葉や文化を学べる	国際交流ができる	外国人の姿勢から学べる	言葉が通じない	外国人が固まる	習慣や服装が違う	ルールを守らない	治安が乱れるこわい	外国人が優遇されている
学年性別	小5男	0.0	1.4	0.7	1.4	4.8	1.4	11.7	10.3	2.1
	小5女	0.0	0.6	1.2	0.6	4.1	1.8	8.9	11.8	2.4
	中2男	1.2	6.2	0.0	0.0	1.2	2.5	12.3	6.2	4.9
	中2女	0.0	7.2	0.0	0.0	1.8	1.8	15.3	9.0	0.9
外国友人	いない	0.9	4.3	0.0	0.0	2.6	0.9	8.5	7.7	6.8
	1人	0.0	1.2	1.2	3.6	6.0	1.2	13.1	11.9	1.2
	2人～	0.0	2.2	0.9	0.0	2.2	1.3	12.6	8.7	0.9
	5人～	0.0	6.6	0.0	0.0	6.6	6.6	13.1	16.4	1.6
学校別	A小	0.0	0.0	1.4	2.9	10.0	2.9	7.1	10.0	1.4
	B小	0.0	2.7	1.4	0.0	1.4	1.4	19.2	9.6	1.4
	C小	0.0	1.1	0.0	1.1	4.3	1.1	6.5	8.6	2.2
	D小	0.0	0.0	1.3	0.0	2.6	1.3	9.0	16.7	3.8
	E中	0.0	6.7	0.0	0.0	2.9	1.9	10.6	9.6	1.0
	F中	0.0	6.8	0.0	0.0	0.0	2.3	20.5	9.1	4.5
	G中	2.3	6.8	0.0	0.0	0.0	2.3	15.9	2.3	4.5
全体		0.2	3.2	0.6	0.6	3.4	1.8	11.7	9.9	2.4

注）ここでの数値は自由回答を類型化し、各類型に該当するケースのNに対する割合を示している。自由回答の中には、複数の内容が含まれるため、合計は100％をこえる。

表3-20　大泉町に外国人がいることに関する父の意見――続き

		困る点			その他				N
		外国人が多すぎる	外国人と平等に接するべき	受け入体制をしっかりと	その他	とくになし	わからない	無回答	
学年性別	小5男	3.4	2.1	0.7	4.1	17.2	0.7	42.8	145
	小5女	3.0	2.4	0.0	5.3	10.7	1.2	52.1	170
	中2男	7.4	2.5	0.0	4.9	13.6	0.0	42.0	81
	中2女	4.5	1.8	0.0	5.4	12.6	0.0	45.9	110
外国友人	いない	6.0	2.6	0.0	3.4	12.8	0.9	49.6	118
	1人	3.6	2.4	1.2	4.8	14.3	0.0	40.5	83
	2人～	2.6	1.3	0.0	6.1	13.9	0.4	49.8	231
	5人～	6.6	4.9	0.0	3.3	11.5	1.6	36.1	61
学校別	A小	2.9	0.0	1.4	5.7	12.9	1.4	44.3	71
	B小	4.1	2.7	0.0	2.7	16.4	1.4	39.7	73
	C小	4.3	2.2	0.0	6.5	17.2	1.1	49.5	93
	D小	1.3	3.8	0.0	3.8	7.7	0.0	56.4	78
	E中	1.9	1.0	0.0	6.7	16.3	0.0	46.2	104
	F中	4.5	2.3	0.0	4.5	2.3	0.0	50.0	43
	G中	15.9	4.5	0.0	2.3	15.9	0.0	34.1	44
全体		4.2	2.2	0.2	4.9	13.4	0.6	46.4	506

表3-21　大泉町に外国人がいることに関する母の意見（自由回答の類型化）　単位：人、％

		良い点			困る点					
		外国の言葉や文化を学べる	国際交流ができる	外国人の姿勢から学べる	言葉が通じない	外国人が固まる	習慣や服装が違う	ルールを守らない	治安が乱れるこわい	外国人が優遇されている
学年性別	小5男	0.7	1.3	1.3	1.3	7.3	4.6	19.2	17.9	2.0
	小5女	0.6	1.7	2.8	2.2	5.5	2.8	14.4	23.2	2.2
	中2男	1.2	2.4	3.5	1.2	7.1	3.5	18.8	21.2	3.5
	中2女	0.0	2.7	3.6	1.8	0.0	3.6	14.5	22.7	1.8
外国友人	いない	0.8	4.0	0.8	0.8	4.8	3.2	13.7	20.2	3.2
	1人	0.0	0.0	3.5	4.7	8.2	3.5	17.6	29.4	1.2
	2人～	0.8	1.3	4.2	1.3	3.8	3.8	16.3	20.4	0.8
	5人～	0.0	3.2	0.0	1.6	7.9	4.8	22.2	17.5	7.9
学校別	A小	1.3	2.7	5.3	2.7	6.7	1.3	14.7	21.3	1.3
	B小	1.3	1.3	0.0	2.7	8.0	9.3	25.3	17.3	1.3
	C小	0.0	1.0	2.0	0.0	5.0	2.0	16.0	20.0	4.0
	D小	0.0	1.2	1.2	2.4	6.1	2.4	11.0	24.4	1.2
	E中	0.0	1.9	4.8	1.0	1.9	3.8	10.6	24.0	2.9
	F中	0.0	2.2	2.2	4.4	4.4	6.7	26.7	17.8	2.2
	G中	2.2	4.3	2.2	0.0	4.3	0.0	19.6	21.7	2.2
全体		0.6	1.9	2.7	1.7	5.1	3.6	16.5	21.3	2.3

注）ここでの数値は自由回答を類型化し、各類型に該当するケースのNに対する割合を示している。自由回答の中には、複数の内容が含まれるため、合計は100％をこえる。

表3-21　大泉町に外国人がいることに関する母の意見――続き

		困る点			その他				N
		外国人が多すぎる	外国人と平等に接するべき	受け入体制をしっかりと	その他	とくになし	わからない	無回答	
学年性別	小5男	7.3	4.6	0.0	4.6	9.3	2.0	27.8	145
	小5女	6.6	3.3	1.1	6.6	8.8	0.0	33.1	170
	中2男	4.7	3.5	1.2	9.4	7.1	1.2	24.7	81
	中2女	12.7	6.4	0.0	2.7	4.5	0.0	30.9	110
外国友人	いない	5.6	5.6	0.0	7.3	7.3	1.6	31.5	118
	1人	14.1	2.4	1.2	5.9	2.4	0.0	22.4	83
	2人～	6.7	4.2	0.8	5.0	8.8	0.0	32.5	231
	5人～	7.9	6.3	0.0	6.3	9.5	1.6	23.8	61
学校別	A小	8.0	2.7	0.0	9.3	6.7	0.0	29.3	71
	B小	6.7	2.7	1.3	2.7	9.3	1.3	30.7	73
	C小	8.0	5.0	1.0	3.0	14.0	1.0	25.0	93
	D小	4.9	4.9	0.0	8.5	4.9	1.2	39.0	78
	E中	9.6	4.8	0.0	4.8	8.7	1.0	26.0	104
	F中	6.7	4.4	0.0	8.9	0.0	0.0	35.6	43
	G中	10.9	6.5	2.2	4.3	4.3	0.0	26.1	44
全体		7.8	4.4	0.6	5.7	7.8	0.8	29.8	506

大泉に来て、税金を納めず手当だけもらうのが現状。町民は外国人の為の納税かといやになってしまう面もある」（F中・男子・外国人の友人なし／父）のように、税金をきちんと納めずに、国保の出産育児一時金をもらう外国人に対する不信感を募らせる者もいる。

さらに、「ルールを守らない」という問題は、自らの子どもを介して関係する外国人児童・生徒の親に対する意見として表明されることもある。

たとえば、「自国の文化を大切にすべきだと思うが団体生活のルールについては日本の習慣・文化を学んでほしい。私がその立場だったらそうするでしょうから。言葉も子供は日本語を覚えるのが早いが、親には（注—育成会の）役員等が頼めない。私の地区は子供だけ参加するので少し問題になってる」（C小・男子・外国人の友人２人～／母）、「通学班で登校する習慣がブラジルの方ではないし、旗当番の習慣もないということで、いろいろ不都合な点があります」（A小・男子・外国人の友人１人／母）というように育成会の行事や通学班の旗当番への不参加・非協力が団体生活のルールの問題として語られている。

一方、「治安が乱れる、こわい」という主旨の意見も数多い。そうした意見は父母ともに見られるが、とくに母親にその傾向が強い。

「夜は集団でいる事が多いのでこわい」（D小・男子・外国人の友人なし／父）、「独身の外国人はギラギラしてて恐いと思う時もある」（C小・男子・外国人の友人２人～／母）のように外国人に対する「恐い」イメージを訴えるものもあれば、「不況の為、治安が悪くなるのではないかと少し不安。外国人の麻薬等の問題が気になる。一部で盛んに取引されてると聞いてる」（C小・女子・外国人の友人２人～／母）、「良い事はたくさんありますが、一つ大きな問題があります。大泉の留置場に入りきれない程の犯罪者、他の町や市の警察にも頼んだそうです。それはほとんどが外国の方だそうです。先日私も、車の窓を割り、バックを盗んだ外国人を見ました」（E中・女子・外国人の友人２人～／母）といった噂も含めた犯罪の増加を心配する声もある。その結果、「アンケート等において大泉町には住みたくないなど、町外の人達の意見をよく聞く。事実、人口は微増であるが外国人の数は増加し続け、日本人人口は減少化傾向にある。余談だが、夜は恐くて歩けない等有。（実際恐い→島国根性?）」（A小・女子・外国人の友人２人～／父）と大泉の日本人の減少化傾向を、治安問題と結びつけて語る者もいる。

しかも、このような治安の問題は、自らの子どもに対する直接的な心配として表明されることもある。

事実、「女の子を持つ親としてはレイプ事件が多く、子供を外に出すのが心配です。ブラジル人が多く、男女がベッタリしていたり、平気でキスをしたり、とても嫌な感じがすると言う人が多く、私も実際そう思う」（E中・男子・外国人の友人なし／母）、「大泉町の中がブラジル人中心になりそうで、少し不安です。夜歩いている人は外国人ばかりで子供を一人で歩かせることが出来ない」（E中・女子・外国人の友人２人～／母）、「不安に思う事があります。娘がいるので、夜一人で歩かせるのは不安です。日本人にもいろいろな人はいるのでしょうが、外人の方がゾロゾロ歩いているのを目にすると…申し訳ないのですが…」（E中・男子・外国人の友人２人～／母）というように、女の子をもつ親の心配や子どもが夜道を歩く危険性を語る意見が多い。

このように、日系ブラジル人を中心にした外国人が数多く在住するにともなって、セグリゲート化が進むと同時に、「ルールを守らない」ことや「治安の乱れ」を心配する意見が少なからず生み出されるようになっている。

もちろん、これらの意見には、日常生活における自らの体験に裏打ちされたものもあるが、噂によるもの、特殊な事実を誇張したもの等、必ずしも現実を反映していないものも少なくない。事実、大泉警察署によると、1997年に発生した事件のうち、外国人の占める割合は1割台で必ずしも高くない[2]。しかし、たとえ偏見や誇張だとしても、人々の中にこのような意識があることは見逃せない。なぜなら、このような意識が外国人とのセグリゲート化をより一層固定化し、外国人を排除する可能性をもっているからである。それだけ、大泉町の住民は、外国人との「共生」という点で大きな課題を抱えているといえる。

第２項　親の外国人との接触の頻度・内容

それでは、このような大人たちの行動や意識は、子どもたちにどのように反映しているのだろうか。あ

るいは子どもたちの交流と大人たちの行動や意識との間にいかなる関係があるのだろうか。

この点について、まず親の社会経済的特質が子どもの外国人児童・生徒との交流にいかなる影響を与えているのかという側面から見ていこう。

表3-22、表3-23、表3-24、表3-25は、それぞれ外国人の友人数の多さと親の学歴・階層・年収・居住年数の関連をまとめたものである。ここから、外国人の友人数の多さは親の学歴・階層・年収・居住年数とはほとんど無関係であることがわかる。一般に、子どもの生活や意識に親の属性が様々な形で影響を与えていることを考えると、意外な印象を受ける。

表3-22　父親の最終学歴　　単位：人、%

		中学校	高校	専門学校	短大高専	大学	大学院	その他	合計
学年性別	小5男	5.0	55.4	9.4	4.3	20.9	3.6	1.4	139
	小5女	6.7	53.4	5.5	4.3	28.8	1.2	0.0	163
	中2男	3.8	51.9	10.1	3.8	27.8	1.3	1.3	79
	中2女	4.7	57.9	10.3	0.9	22.4	1.9	1.9	107
外国友人	いない	8.3	50.0	11.1	3.7	25.9	0.9	0.0	108
	1人	3.8	51.9	10.1	1.3	30.4	2.5	0.0	79
	2人～	3.9	57.0	7.9	3.5	23.7	1.8	2.2	228
	5人～	6.7	55.0	3.3	6.7	23.3	5.0	0.0	60
学校別	A小	2.9	42.9	5.7	8.6	35.7	4.3	0.0	70
	B小	8.2	60.3	6.8	1.4	19.2	2.7	1.4	73
	C小	5.6	65.2	3.4	3.4	20.2	2.2	0.0	89
	D小	7.1	45.7	14.3	4.3	27.1	0.0	1.4	70
	E中	3.0	48.5	9.9	3.0	31.7	3.0	1.0	101
	F中	7.1	59.5	11.9	0.0	21.4	0.0	0.0	42
	G中	4.7	67.4	9.3	2.3	11.6	0.0	4.7	43
合計		5.3	54.7	8.4	3.5	25.0	2.0	1.0	488

注）不明・無回答を除く。

表3-23　母親の最終学歴　　単位：人、%

		中学校	高校	専門学校	短大高専	大学	大学院	その他	合計
学年性別	小5男	5.6	53.5	19.4	14.6	6.3	0.7	0.0	144
	小5女	5.6	50.0	18.5	21.9	3.9	0.0	0.0	178
	中2男	4.8	45.2	22.6	17.9	9.5	0.0	0.0	84
	中2女	3.7	51.9	21.3	18.5	4.6	0.0	0.0	108
外国友人	いない	5.1	47.9	24.8	15.4	6.8	0.0	0.0	117
	1人	5.0	46.3	17.5	23.8	7.5	0.0	0.0	80
	2人～	5.0	52.9	18.3	19.2	4.2	0.4	0.0	240
	5人～	3.2	51.6	21.0	16.1	8.1	0.0	0.0	62
学校別	A小	2.7	44.0	24.0	24.0	5.3	0.0	0.0	75
	B小	4.0	62.7	13.3	14.7	4.0	1.3	0.0	75
	C小	9.3	52.6	14.4	18.6	5.2	0.0	0.0	97
	D小	5.3	46.7	25.3	17.3	5.3	0.0	0.0	75
	E中	1.0	45.1	21.6	24.5	7.8	0.0	0.0	102
	F中	11.4	47.7	22.7	13.6	4.5	0.0	0.0	44
	G中	4.3	58.7	21.7	8.7	6.5	0.0	0.0	46
合計		5.1	50.6	20.0	18.5	5.6	0.2	0.0	514

注）不明・無回答を除く。

表3-24　世帯年収　　単位：人、％

		200万円未満	200万円～	400万円～	600万円～	800万円～	1000万円～	1500万円～	2000万円～	合　計
学	小５男	3.0	12.8	22.6	29.3	20.3	8.3	2.3	1.5	133
年	小５女	3.8	10.8	19.7	35.7	22.3	5.1	1.3	1.3	157
性	中２男	0.0	3.8	23.8	31.3	16.3	12.5	8.8	3.8	80
別	中２女	1.0	7.7	18.3	41.3	18.3	10.6	1.9	1.0	104
外	いない	2.7	11.8	28.2	25.5	20.9	7.3	1.8	1.8	110
国	１　人	1.3	9.0	16.7	38.5	19.2	14.1	0.0	1.3	78
友	２人～	1.9	7.9	17.3	41.6	20.1	7.0	2.8	1.4	214
人	５人～	3.3	10.0	26.7	21.7	15.0	10.0	10.0	3.3	60
学	A　小	2.8	9.7	16.7	36.1	25.0	6.9	0.0	2.8	72
	B　小	2.8	16.9	19.7	32.4	15.5	7.0	4.2	1.4	71
	C　小	5.2	11.5	25.0	36.5	14.6	4.2	2.1	1.0	96
校	D　小	2.0	7.8	21.6	21.6	37.3	9.8	0.0	0.0	51
	E　中	0.0	5.0	21.0	37.0	19.0	12.0	4.0	2.0	100
	F　中	2.3	9.3	18.6	32.6	16.3	14.0	2.3	4.7	43
別	G　中	0.0	4.9	22.0	41.5	14.6	7.3	9.8	0.0	41
合　計		2.3	9.5	20.9	34.4	19.8	8.4	3.0	1.7	474

注）不明・無回答を除く。

表3-25　世帯階層　　単位：人、％

		安定的経営・管理層	不安定経営・管理層	自営業者層	安定的労働者層	不安定労働者層	合　計
学	小５男	9.6	8.9	19.2	33.6	28.8	146
年	小５女	16.2	9.8	19.1	30.6	24.7	173
性	中２男	22.2	6.2	17.3	34.6	19.8	81
別	中２女	15.3	9.0	16.2	32.4	27.0	111
外	いない	13.6	7.6	16.1	34.7	28.0	118
国	１　人	15.3	9.4	14.1	36.5	24.7	85
友	２人～	15.9	8.6	18.0	33.0	24.5	233
人	５人～	14.8	11.5	27.9	21.3	24.6	61
学	A　小	24.7	8.2	20.5	28.8	17.8	73
	B　小	8.1	10.8	28.4	24.3	28.4	74
	C　小	10.6	7.4	9.6	42.6	29.8	94
校	D　小	10.3	11.5	20.5	29.5	28.2	78
	E　中	22.1	8.7	18.3	32.7	18.3	104
	F　中	15.9	9.1	20.5	27.3	27.3	44
別	G　中	11.4	4.5	9.1	40.9	34.1	44
合　計		15.1	8.8	18.2	32.5	25.4	511

注）無職層（3ケース）は不安定労働者層に含めた

それならば、親自身は、地域や職場で外国人とどの程度、どのような内容で接触し、交流しているのであろうか。表3-26から、この点についてみてみると、父母ともに外国人との接触はほとんどないことがわかる。(補注) しかも、これに関して、子どもの学年、男女、外国人の友人の数による差は見られない。

（補注）もちろん、なかには「職場などでは意外と外国の人の方がマナーとか女性に対しての優しさが多く見られた」（E中・女子・外国人の友人２人～／母）、「会社で働いている外国人の方は目的を持って日本に来ているせいでしょうか、とても働き者です。条件の悪いところでも夜遅くまで働いて、とてもまねできないと思ってます」（E中・女子・外国人の友人２人～／母）と、職場をともにする外国人に良い印象を持つ人もいる。しかし、そうした体験をもつ人は少数である。

外国人と接触や交流が少ないのは、子どもに関する教育・社会活動の場面においても共通している。日本人の親の場合、表3-27、表3-28からわかるように、スポーツ少年団は父母とも参加する者は少数で、G

表3-26　父母の外国人との接触　　単位：人、％

		父					母				
		職場に外国人がいる	外国人を家に招いた事ある	外国人とﾚｼﾞｬｰの経験ある	外国人のﾎﾞﾗﾝﾃｨｱしている	N	職場に外国人がいる	外国人を家に招いた事ある	外国人とﾚｼﾞｬｰの経験ある	外国人のﾎﾞﾗﾝﾃｨｱしている	N
学年性別	小5男	17.2	15.2	21.4	0.0	145	9.9	15.2	15.9	0.7	151
	小5女	22.5	13.6	19.5	3.0	169	5.5	11.6	12.7	2.8	181
	中2男	22.2	18.5	21.0	2.5	81	12.9	15.3	20.0	1.2	85
	中2女	17.3	10.9	20.0	4.5	110	13.6	13.6	15.5	1.8	110
外国友人	いない	23.1	12.8	17.1	2.6	117	7.3	10.5	11.3	1.6	124
	1　人	12.0	12.0	18.1	1.2	83	9.4	12.9	12.9	2.4	85
	2人～	20.3	14.3	20.3	3.5	231	10.8	14.2	15.0	1.7	240
	5人～	23.0	19.7	27.9	0.0	61	11.1	17.5	28.6	1.6	63
学校別	A　小	17.1	15.7	17.1	1.4	70	5.3	12.0	10.7	4.0	75
	B　小	21.9	17.8	23.3	2.7	73	13.3	16.0	17.3	1.3	75
	C　小	26.9	12.9	20.4	0.0	93	4.0	13.0	13.0	0.0	100
	D　小	12.8	11.5	20.5	2.6	78	8.5	12.2	15.9	2.4	82
	E　中	16.3	8.7	17.3	4.8	104	13.5	10.6	11.5	1.9	104
	F　中	32.6	25.6	25.6	2.3	43	13.3	17.8	20.0	2.2	45
	G　中	13.6	15.9	22.7	2.3	44	13.0	19.6	28.3	0.0	46
全体		19.8	14.3	20.4	2.4	505	9.7	13.7	15.4	1.7	527

表3-27　父の教育・社会活動への参加と外国人との接触　　単位：人、％

		子ども会		スポーツ少年団		PTA		N
		参加する	外国人と話す	参加する	外国人と話す	参加する	外国人と話す	
学年性別	小5男	44.8	9.0	34.5	6.9	36.6	5.5	145
	小5女	39.6	7.7	10.1	1.2	36.7	6.5	169
	中2男	40.7	12.3	25.9	6.2	32.1	8.6	81
	中2女	40.9	5.5	14.5	4.5	24.5	5.5	110
外国友人	いない	35.0	6.8	17.9	5.1	28.2	6.0	117
	1　人	37.3	3.5	20.5	4.8	34.9	2.4	83
	2人～	45.0	8.2	19.8	3.5	30.7	6.9	231
	5人～	42.6	14.8	23.0	3.3	49.2	8.2	61
学校別	A　小	30.0	4.3	21.4	1.4	37.1	2.9	70
	B　小	41.1	12.3	21.9	5.5	41.1	9.6	73
	C　小	40.9	11.8	24.7	5.4	35.5	8.6	93
	D　小	55.1	3.8	16.7	2.6	33.3	2.6	78
	E　中	35.6	5.8	15.4	2.9	23.1	1.9	104
	F　中	34.9	0.0	14.0	4.7	30.2	4.7	43
	G　中	59.1	22.7	34.1	11.4	36.4	20.5	44
全体		41.5	8.3	20.6	4.4	33.3	6.3	505

注）1.参加する＝「よく参加する」＋「ときどき参加する」。
　　2.外国人と話す＝参加する外国人と「よく話す」＋「あいさつ程度」。

表3-28　母の教育・社会活動への参加と外国人との接触　　単位：人、％

		子ども会		スポーツ少年団		ＰＴＡ		N
		参加する	外国人と話す	参加する	外国人と話す	参加する	外国人と話す	
学年性別	小５男	83.4	16.6	39.1	9.9	84.8	16.6	151
	小５女	81.8	12.7	14.9	1.1	81.8	13.3	181
	中２男	82.4	17.6	37.6	8.2	87.1	16.5	85
	中２女	80.0	11.8	20.0	6.4	88.2	13.6	110
外国友人	いない	76.6	11.3	23.4	5.6	80.6	9.7	124
	１　人	84.7	8.2	28.2	5.9	84.7	11.8	85
	２人～	83.8	15.8	27.9	5.8	87.1	17.1	240
	５人～	82.5	20.6	27.0	4.8	82.5	20.6	63
学校別	Ａ　小	80.0	6.7	24.0	1.3	89.3	6.7	75
	Ｂ　小	77.3	16.0	26.7	8.0	76.0	18.7	75
	Ｃ　小	84.0	22.0	31.0	7.0	83.0	21.0	100
	Ｄ　小	87.8	11.0	20.7	3.7	84.1	11.0	82
	Ｅ　中	82.7	10.6	20.2	5.8	89.4	8.7	104
	Ｆ　中	75.6	4.4	31.1	6.7	86.7	13.3	45
	Ｇ　中	82.6	32.6	41.3	10.9	84.8	30.4	46
全体		81.9	14.4	26.6	5.9	84.8	14.8	527

注）1.参加する＝「よく参加する」＋「ときどき参加する」。
　　2.外国人と話す＝参加する外国人と「よく話す」＋「あいさつ程度」。

表3-29　親から見た外国人の教育・社会活動への参加状況　　単位：人、％

		子供会	ｽﾎﾟｰﾂ少年団	ＰＴＡの行事	N
学年性別	小５男	42.4	15.9	32.5	151
	小５女	41.1	11.4	26.4	182
	中２男	50.6	14.3	41.2	85
	中２女	32.5	10.0	28.1	114
外国友人	いない	37.6	10.8	32.5	126
	１　人	35.3	9.6	36.7	86
	２人～	43.3	13.6	32.5	242
	５人～	46.0	19.6	40.0	63
学校別	Ａ　小	37.3	6.7	28.0	75
	Ｂ　小	56.0	25.3	29.3	75
	Ｃ　小	42.6	7.9	31.7	101
	Ｄ　小	30.5	8.5	26.8	82
	Ｅ　中	32.4	7.4	27.8	108
	Ｆ　中	40.0	13.3	28.9	45
	Ｇ　中	56.5	10.9	52.2	46
合計		40.8	10.9	30.8	532

注）1.子供会、スポーツ少年団は日本人の親から見た外国人の加入の有無、ＰＴＡは日本人の親から見た外国人の行事への参加度（「よく参加」＋「ときどき参加」）を示す。
　　2.単位＝人、％。

中の母親が41.3％である以外は、学校、子どもの性別、学年などにかかわりなくいずれの父母も、多くて30％台で10％～20％台が中心である。だが、子ども会、ＰＴＡは、父親の参加は30％台から50％台となり、母親はそのほとんどが参加している。これに対し、外国人の親は、スポーツ少年団ではＢ小の外国人の親がやや多い以外は日本人と同様参加する者は少ない（表3-29）。だが、子ども会、ＰＴＡで３、４割の者が参加し、中には中２男、Ｂ小、Ｇ中の子ども会、Ｇ中のＰＴＡのように半数を超える場合もある。したがって、少なくとも母親や少数の父親は、子ども会やＰＴＡの活動を通して外国人と一定の接触機会があるとみなすことができる。しかし、このような機会があっても、実際に、参加する外国人と交流することは少ない。「あいさつ程度はする」を含めても、子ども会やＰＴＡ活動を通して外国人と交流する父母が、

表3-30　親から見た子どもの外国人の友人の有無と親同士の会話

		友人あり	友の親と話す（父）	友の親と話す（母）
学年性別	小5男	64.9	10.3	16.6
	小5女	69.1	6.5	13.8
	中2男	53.6	7.4	11.8
	中2女	54.9	7.3	13.6
外国友人	いない	25.4	4.3	5.6
	1人	61.6	3.6	9.4
	2人～	73.9	7.4	16.7
	5人～	93.5	18.0	25.4
学校別	A小	46.7	2.9	6.7
	B小	82.7	15.1	21.3
	C小	75.2	10.8	18.0
	D小	58.5	3.8	13.4
	E中	58.3	4.8	11.5
	F中	51.1	4.7	6.7
	G中	45.7	15.9	21.7
合計		61.7	7.9	14.2

注）1.友の親と話す＝「よく話す」＋「あいさつ程度」。
2.単位＝人、%。

G中の父で20%、母で30%台である点が目につく程度である。父母の場合、外国人との接触機会があるにもかかわらず、あいさつを含めて、外国人との交流はほとんどなされていないのが現状である。

さらに、自らの子どもの外国人児童・生徒との交流に関する認識について見てみると（表3-30）、小5、B小・C小などの外国人の多い学校、外国人の友人の多い子の親に、自らの子どもが外国人児童・生徒の友人をもっていると考えている者が多い。これは、子どもの実態に基本的に対応している。それにもかかわらず、それらの友人の親と会話する父母は少ない。会話をするのは、5人以上の外国人の友人をもつ子どもの母親、B小・G中の母親が20%台である以外は、すべて10%台かそれ以下にとどまっている。自らの子どもの友人関係を通して、父母が外国人と交流することもないのが現実なのである。その結果、「親同志の親交がなく、どんな子でどんな家なのかはっきりせず、学校以外での交流はあまりしてほしくありません」（C小・男子・外国人の友人2人～／親）と、子どもの外国人との友人づきあいを敬遠する親も現れている。

第3項　外国人の存在がもたらす影響に関しての父母の意識

このように親は、ほとんどの場合、あいさつ程度の接触も含めて、外国人との交流をしていない。この点で、子どもの実態と親の現実は大きく異なっている。

したがって、親の外国人に対する意識も子どもの意識と異なる可能性が大きいことが予測できる。そこで、この点を検討するために、外国人児童・生徒の存在がもたらす影響に関する父母の意識についてまとめたものが、表3-31である。これは、子どもたちに対してとほぼ同様な形で提示した問いへの答えをまとめたものである。ここから、「子どもの国際的視野が広がる」が学年、男女、外国人の友人の数と関係なく、父母とも約半数存在し、「外国人のせいで勉強が遅れる」「自分の子は日本人だと強く感じる」は父母とも少数であることがわかる。これは、子どもの意識とほぼ同様な傾向として理解できる。

具体的には、次のような意見が述べられている。

「外国の習慣の違い、色々な考え方や生活があることなど、視野が広がって良いと思います。日本人は単一民族なので外国の人を受け入れることが苦手ですが、もっと交流を持つべきだと思います」（E中・女子・外国人の友人1人／父）

「本町の人口の1割以上が外国人なのだから異国文化やグローバルな視野を持つ身近な人達として交流がなければ淋しいし、未来がない」（G中・男子・外国人の友人2人～／父）

表3-31　外国人の存在がもたらす影響に関しての父母の意識

		父			母		
		子どもの国際的視野広がる	外国人のせいで勉強遅れる	自分の子は日本人と感じる	子どもの国際的視野広がる	外国人のせいで勉強遅れる	自分の子は日本人と感じる
学年性別	小5男	49.7	9.0	22.8	53.6	8.6	22.5
	小5女	52.1	5.3	16.6	54.1	7.2	19.9
	中2男	56.8	8.6	16.0	57.6	8.2	15.3
	中2女	51.8	5.5	13.6	57.3	4.5	16.4
外国友人	いない	48.7	11.1	22.2	50.8	10.5	20.2
	1人	47.0	4.8	24.1	45.9	8.2	29.4
	2人～	53.7	6.9	12.6	59.2	9.6	14.6
	5人～	60.7	3.3	18.0	65.1	6.3	19.0
学校別	A小	47.1	8.6	15.7	54.7	8.0	20.0
	B小	53.4	6.8	20.5	57.3	9.3	18.7
	C小	53.8	7.5	22.6	55.0	7.0	27.0
	D小	48.7	5.1	17.9	48.8	7.3	17.1
	E中	50.0	5.8	12.5	55.8	4.8	13.5
	F中	55.8	9.3	20.9	57.8	11.1	22.2
	G中	61.4	6.8	13.6	60.9	4.3	13.0
全体		52.1	6.9	17.6	55.2	7.2	19.0

注）1.ここでの数値は各項目に関して「まったくその通り」「どちらかといえばそう思う」と答えた者の割合である。
2.単位＝%。

「視野も広がっていいと思う。私の子供の頃は外国の子など学校にはいなかったので外国人というだけでドキドキしたが、今の子供はそういうこともなく、わけ隔てなく遊んだりしているようだ。いいことだと思う」（C小・男子・外国人の友人5人～／母）

「国によって文化や考え方が違うことを肌で感じられることは、子供にとってプラスになると思っています」（D小・女子・外国人の友人2人～／母）

ただし、これは、厳密な親子の対応関係を意味しているものではない。父母と子どもの全体的な特徴が同様な傾向を示しているだけにすぎない。そのため、より厳密に親子ペアの意識の類似関係を見てみると、表3-32、表3-33のように、父母ともにいずれの項目でも、学年、性別、学校、子どもの外国人の友人数の違いに関わりなく、親子一致率は50%を超えている。つまり、全体として親子の意識は類似する傾向があるといえる。ただし、3つの項目に関する類似関係の内実は、それぞれ異なっている。

まず、「外国人のせいで勉強が遅れる」という質問に関しては、親子とも否定的な答えをするケースがほとんどである。父母どちらの場合でも、学年、性別、学校、子どもの外国人の友人数の違いに関わりなく、ほぼ90%に達している。その意味で、この質問に含まれる外国人に対するマイナスイメージについては、ほぼ完全に親子が否定的な方向で一致した意識をもっているといえる。だが、「自分の子は日本人だと強く感じる」になると、親子の意識の類似性は弱くなる。父母どちらの場合も、学年、性別、学校、子どもの外国人の友人数に関係なく、親子一致率は60%～70%台に低下する。ただし、そのほとんどがこの質問に対して否定的な意識で一致している。これに対し、「子どもの国際的視野が広がる」という親の意識と「世界に興味が広がる」という子どもの意識の対応関係を見ると、父母とも親子一致率はやや低下し、全体として60%前後の一致率となる。しかし、その内実は他の2つの項目と大きく異なり、肯定的一致率と否定的一致率がほぼ等しい形を取っている。したがって、この点に関しては親子とも全体としてみると、意見が分かれるが、その内容に関しては父母ともに親子の間で一致する傾向があるということである。

こうして、外国人の存在がもたらす影響に関しては、父母ともに、親子の意識が類似する傾向が強いことが明らかになる。

表3-32　外国人の存在がもたらす影響に関しての父の意識と子どもとの一致率　　単位：%

		子どもの国際的視野が広がる			外国人のせいで勉強が遅れる			自分の子は日本人だと強く感じる		
		親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率	親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率	親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率
学年性別	小5男	62.6	31.3	31.3	88.1	1.5	86.6	64.6	13.1	51.5
	小5女	59.1	35.7	23.4	91.2	1.3	89.9	73.4	9.5	63.9
	中2男	58.2	36.7	21.5	91.1	2.5	88.6	68.4	5.1	63.3
	中2女	51.0	25.5	25.5	93.5	0.0	93.5	70.2	6.7	63.5
外国友人	いない	54.4	21.4	33.0	87.2	2.7	84.5	65.7	11.1	54.6
	1人	54.5	24.1	30.4	92.5	0.0	92.5	70.6	10.3	60.3
	2人～	61.5	38.0	23.5	91.4	1.4	90.0	73.1	8.4	64.7
	5人～	57.9	43.9	14.0	91.4	0.0	91.4	67.8	8.5	59.3
学校別	A小	54.6	27.3	27.3	89.4	1.5	87.9	71.3	6.1	65.2
	B小	58.2	35.8	22.4	91.2	4.4	86.8	70.6	13.2	57.4
	C小	71.1	41.0	30.1	87.5	0.0	87.5	67.8	16.1	51.7
	D小	56.5	29.0	27.5	91.4	0.0	91.4	68.7	7.5	61.2
	E中	50.5	28.7	21.8	94.1	0.0	94.1	72.3	5.0	67.3
	F中	59.5	26.2	33.3	90.5	2.4	88.1	63.5	9.8	53.7
	G中	57.1	38.1	19.0	90.5	2.4	88.1	68.3	4.9	63.4
全体		58.0	32.3	25.7	90.8	1.3	89.5	69.4	9.1	60.3

注）ここでの数値は、表3-15と表3-31の基礎データより作成。

表3-33　外国人の存在がもたらす影響に関しての母の意識と子どもとの一致率　　単位：%

		子どもの国際的視野が広がる			外国人のせいで勉強が遅れる			自分の子は日本人だと強く感じる		
		親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率	親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率	親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率
学年性別	小5男	60.7	31.4	29.3	88.2	1.4	86.8	65.5	13.7	51.8
	小5女	58.4	36.7	21.7	89.6	1.2	88.4	70.5	9.8	60.7
	中2男	54.7	34.5	20.2	91.7	2.4	89.3	72.3	6.0	66.3
	中2女	54.2	29.9	24.3	94.4	0.0	94.4	67.7	6.7	61.0
外国友人	いない	53.3	20.8	32.5	89.3	1.7	87.6	69.3	10.3	59.0
	1人	55.6	23.5	32.1	91.5	0.0	91.5	69.5	13.4	56.1
	2人～	59.4	40.2	19.2	90.5	1.3	89.2	70.8	8.4	62.4
	5人～	61.7	46.7	15.0	91.8	1.6	90.2	64.6	8.1	56.5
学校別	A小	52.9	30.0	22.9	85.9	0.0	85.9	70.8	8.3	62.5
	B小	61.9	39.4	22.5	91.7	5.6	86.1	70.8	12.5	58.3
	C小	68.9	40.0	28.9	88.7	0.0	88.7	66.3	17.9	48.4
	D小	52.0	26.7	25.3	89.6	0.0	89.6	65.8	5.5	60.3
	E中	51.0	31.4	19.6	95.1	0.0	95.1	72.6	5.9	66.7
	F中	59.1	27.3	31.8	88.7	2.3	86.4	62.8	9.3	53.5
	G中	57.8	37.8	20.0	93.3	2.2	91.1	69.8	4.7	65.1
全体		57.5	33.4	24.1	90.6	1.2	89.4	68.8	9.6	59.2

注）表3-32と同じ。

第4項　外国人に対する要望と子どもの交流に対する意識

さらに、外国人に対する親の意識として、外国人に対する要望についてみてみると、表3-34のごとく、父母ともに、子どもと同様、全体として「外国人生徒が母国語を使うのは当然」と「外国人生徒は日本語を習うべき」とする意見が多く、「外国人生徒には母国語で教育すべきである」「外国人児童・生徒は外国人学校に通うべき」とする意見は少ない。しかし、子どもの場合とは異なり、学年・学校による違いは見られない。

ただし、この点も、親子の厳密な対応関係の分析にもとづいた特徴とはいえない。したがって、表3-35、表3-36から、外国人に対する親子の要望の一致率を見ると、父母ともに「外国人生徒は日本語を習うべき」「外国人生徒が母国語を使うのは当然」「外国人生徒には母国語で教育するべきである」（子どもの場合、これに対応するのは「外国人児童・生徒は母国語を習った方がよい」）は全体としてほぼ60%前後

表3-34　外国人に対する要望の要望　　単位：%

		父				母			
		外国人生徒日本語使うべき	外国人生徒母国語使用当然	外国人生徒母国語で教育を	外国人外国人学校行くべき	外国人生徒日本語使うべき	外国人生徒母国語使用当然	外国人生徒母国語で教育を	外国人外国人学校行くべき
学年性別	小5男	66.2	52.4	22.1	16.6	62.9	58.9	22.5	13.9
	小5女	58.6	57.4	26.0	15.4	60.8	60.2	27.1	12.7
	中2男	59.3	60.5	30.9	13.6	64.7	63.5	27.1	12.9
	中2女	59.1	62.7	24.5	12.7	60.9	63.6	25.5	10.0
外国友人	いない	65.0	57.3	24.8	17.9	72.6	66.1	28.2	19.4
	1人	61.4	59.0	25.3	14.5	58.8	58.8	24.7	14.1
	2人～	58.9	58.9	26.8	15.2	61.7	60.4	20.8	9.6
	5人～	59.0	52.5	24.6	9.8	63.4	57.1	25.4	7.9
学校別	A小	62.9	52.9	20.0	15.7	54.7	57.3	21.3	14.7
	B小	61.6	53.4	30.1	19.2	65.3	58.7	26.7	13.3
	C小	58.1	53.8	26.9	12.9	65.0	55.0	29.0	11.0
	D小	66.7	60.3	19.2	16.7	61.0	68.3	22.0	14.6
	E中	56.7	59.6	26.0	10.6	60.6	62.5	24.0	8.7
	F中	60.5	67.4	46.5	30.2	62.2	66.7	46.7	24.4
	G中	63.6	61.4	11.4	2.3	67.4	63.0	10.9	4.3
全体		61.0	57.6	25.3	14.9	62.0	61.1	25.4	12.5

注）ここでの数値は各項目に関して「まったくその通り」「どちらかといえばそう思う」と答えた者の割合である。

表3-35　外国人に対する父の要望と子どもとの一致率　　単位：%

		外国人生徒は日本語を使うべき			外国人生徒が母国語を使うのは当然			外国人生徒には母国語で教育すべきである			外国人生徒は外国人学校へ行くべき		
		親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率	親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率	親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率	親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率
学年性別	小5男	59.1	44.7	14.4	64.6	40.8	23.8	64.3	12.4	51.9	78.8	2.3	76.5
	小5女	55.1	38.0	17.1	56.6	41.5	15.1	59.7	5.8	53.9	82.8	4.5	78.3
	中2男	56.4	34.6	21.8	57.7	47.4	10.3	62.0	15.2	46.8	81.6	5.3	76.3
	中2女	56.6	30.2	26.4	60.9	49.5	11.4	65.1	4.9	60.2	83.8	4.8	79.0
外国友人	いない	63.0	44.1	18.9	59.2	44.4	14.8	67.0	12.3	54.7	76.2	7.6	68.6
	1人	58.5	37.7	20.8	65.4	43.2	22.2	64.1	2.6	61.5	86.4	4.9	81.5
	2人～	56.6	37.4	19.2	59.5	45.1	14.4	62.0	9.4	52.6	82.0	2.8	79.2
	5人～	43.1	24.1	19.0	54.4	40.4	14.0	56.9	12.1	44.8	84.3	1.8	82.5
学校別	A小	56.9	35.4	21.5	57.6	40.9	16.7	56.2	7.8	48.4	82.1	1.5	80.6
	B小	61.2	47.8	13.4	54.4	35.3	19.1	60.0	13.8	46.2	74.6	1.5	73.1
	C小	56.8	42.0	14.8	61.7	38.4	23.3	65.5	8.0	57.5	81.2	2.4	78.8
	D小	52.9	38.6	14.3	66.6	50.7	15.9	64.2	6.0	58.2	85.7	8.6	77.1
	E中	56.4	29.7	26.7	65.0	50.0	15.0	64.7	8.1	56.6	86.9	5.1	81.8
	F中	56.1	36.6	19.5	59.5	47.6	11.9	54.8	14.3	40.5	67.5	10.0	57.5
	G中	57.1	33.3	23.8	46.3	46.3	0.0	70.7	7.3	63.4	88.1	0.0	88.1
全体		56.8	37.6	19.2	60.0	44.1	15.9	62.5	9.0	53.5	81.7	4.0	77.7

注）ここでの数値は各項目に関して「まったくその通り」「どちらかといえばそう思う」と答えた者の割合である。

表3-36　外国人に対する母の要望と子どもとの一致率　　単位：%

		外国人生徒は日本語を使うべき			外国人生徒が母国語を使うのは当然			外国人生徒には母国語で教育すべきである			外国人生徒は外国人学校へ行くべき		
		親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率	親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率	親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率	親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率
学年性別	小5男	64.6	44.0	20.6	62.1	41.4	20.7	61.9	10.8	51.1	82.2	2.1	80.1
	小5女	56.9	39.1	17.8	59.4	44.0	15.4	60.7	7.1	53.6	84.9	4.6	80.3
	中2男	54.7	34.5	20.2	54.7	45.2	9.5	64.3	14.3	50.0	83.9	4.9	79.0
	中2女	58.4	31.5	26.9	65.1	52.8	12.3	67.3	6.7	60.6	90.6	5.7	84.9
外国友人	いない	65.5	43.4	22.1	63.0	49.6	13.4	65.0	13.2	51.8	79.0	8.8	70.2
	1人	65.8	39.0	26.8	67.0	43.5	23.5	68.3	3.7	64.6	87.1	4.7	82.4
	2人～	56.5	37.4	19.1	57.1	43.9	13.2	62.8	9.3	53.5	87.4	2.2	85.2
	5人～	44.2	26.2	18.0	60.0	45.0	15.0	57.4	11.5	45.9	88.5	3.3	85.2
学校別	A小	59.2	32.4	26.8	61.1	44.4	16.7	53.6	5.8	47.8	83.6	1.4	82.2
	B小	58.5	47.1	11.4	56.9	37.5	19.4	62.3	11.6	50.7	81.7	1.4	80.3
	C小	61.5	46.9	14.6	60.6	38.3	22.3	62.1	8.4	53.7	82.1	3.2	78.9
	D小	61.6	37.2	24.4	63.6	51.9	11.7	66.3	9.5	56.8	88.0	8.0	80.0
	E中	58.3	31.1	27.2	68.4	53.5	14.9	67.0	9.0	58.0	92.0	5.1	86.9
	F中	54.6	36.4	18.2	54.6	43.2	11.4	59.1	15.9	43.2	79.0	11.6	67.4
	G中	55.5	33.3	22.2	48.9	46.7	2.2	70.4	6.8	63.6	86.7	0.0	86.7
全体		59.0	38.1	20.9	60.5	45.3	15.2	63.0	9.3	53.7	85.2	4.2	81.0

注）ここでの数値は各項目に関して「まったくその通り」「どちらかといえばそう思う」と答えた者の割合である。

表3-37　外国人との子どもの交流に関する父母の意識　　単位：%

		父		母	
		外国人と積極的に交流を	あまり付き合わないように	外国人と積極的に交流を	あまり付き合わないように
学年性別	小5男	55.0	9.9	53.8	9.7
	小5女	59.7	12.2	58.0	11.8
	中2男	72.9	7.1	75.3	7.4
	中2女	52.7	4.5	52.7	7.3
外国友人	いない	50.0	9.7	50.4	12.0
	1人	51.8	12.9	56.6	10.8
	2人～	63.3	7.5	62.3	6.9
	5人～	69.8	6.3	60.7	9.8
学校別	A小	54.7	9.3	57.1	8.6
	B小	65.3	10.7	57.5	11.0
	C小	57.0	11.0	55.9	10.8
	D小	53.7	13.4	53.8	12.8
	E中	67.3	4.8	64.4	7.7
	F中	37.8	11.1	46.5	9.3
	G中	71.7	2.2	72.7	4.5
全体		59.0	9.1	58.4	9.5

注）ここでの数値は各項目に関して「まったくその通り」「どちらかといえばそう思う」と答えた者の割合である。

であり、「外国人児童・生徒は外国人学校通うべき」がほぼ80%である。しかも、子どもの場合に見られた、学年、学校による差異は見られない。外国人の友人数に関しても、父母の「外国人生徒は日本語を習うべき」が多ければ多いほど父母ともに子どもとの一致率が低下している以外には、それほど目立った特徴は見られない。

なお、「外国人生徒は日本語を習うべき」「外国人生徒が母国語を使うのは当然」は、30%～40%の肯定的一致率、「外国人生徒には母国語で教育するべきである」は50%前後の否定的一致率、「外国人児童・生徒は外国人学校に通うべき」が70%前後の否定的一致率になっている。

したがって、外国人に対する要望の面でも、全体として親子の意識は必ずしも同化を求めないという形で、類似したものになっていると見なすことができる。

そのうえ、自らの子どもが外国人児童・生徒と交流することについても、父母ともに、積極的な意識をもっている。表3-37のように、父母ともに、「あまり深くつきあってほしくない」とする者はごく少数にすぎず(補注)、「積極的に交流してほしい」と答える者が過半数に達している。とくに、中2男、G中に通う子どもがいる父母に積極的な交流を望む者が多く、F中に通う子どもがいる父母に少ないのが目立つが、それ以外は、大きな差はない。

(補注) つきあってほしくない理由としては、「学校へ行かない子が何人かいます。一緒になって行かなくなると困るから。そしてタバコなどを吸っていて自分の子もマネでもすると大変困ります。だから一緒に教育させたくないです」(F中・男子・外国人の友人なし／親)というように、外国人児童・生徒の悪影響を恐れる意見や「仲良くなるのは良いが生活習慣・考え方の違いで日本人同志の友達よりは深くなれない。又、今の学校生活になじんでほしいと思って世話をする事で自分の立場が周りから浮いてしまう事も(ある)」(F中・女子・外国人の友人1人／親)というように、外国人児童・生徒との付き合いがかえって日本人同士の友人関係に悪影響をもたらすことなどがあげられている。

第5項　外国人の「文化的差異」に対する許容意識

このように、日本人の親の外国人児童・生徒に対する意識は、必ずしも同化主義的ではなく、自らの子どもが彼らと交流することに対しても積極的に認める姿勢をもっている。

ところが、外国人の「文化的差異」に対する許容意識を見ると(表3-38)、必ずしも許容度は高くない。外国人児童・生徒がピアスをつける点については、とくに女子の父母を中心に許容する者の割合がやや高いものの、それ以外の点では、子どもと同様、全体として父母とも許容度は低い。それは、子どもの場合にも見られたように、学校では同じルールを守るべきだという意識にもとづいている。ただし、その背後には、子どもとは異なり、自らの子どもを含めた日本人の児童・生徒に対する「悪影響」に対する警戒心が横たわっている。それは、以下のような父母の言葉に端的に示されている。

「学校の中でちょっとした言葉や動作でけんかになることがある。中学になると外国人は学校に来なく

表3-38　外国人児童・生徒の行動に対する父母の許容意識　　単位：%

		父				母			
		ピアスをつけてもよい	掃除をしなくてよい	学校へ来なくてよい	給食は別献立にした方よい	ピアスをつけてもよい	掃除をしなくてよい	学校へ来なくてよい	給食は別献立にした方よい
学年性別	小5男	24.8	0.0	9.7	0.7	31.1	0.0	4.6	0.7
	小5女	37.3	0.0	8.3	1.2	40.3	0.0	6.1	0.6
	中2男	34.6	0.0	12.3	0.0	28.2	0.0	11.8	0.0
	中2女	40.9	0.0	13.6	1.8	44.5	0.0	7.3	0.9
外国友人	いない	27.9	0.0	8.9	0.0	37.4	0.0	6.5	0.8
	1人	47.4	0.0	9.0	1.3	33.7	0.0	2.4	0.0
	2人～	34.1	0.0	11.7	1.3	36.3	0.0	7.7	0.4
	5人～	39.0	0.0	15.3	1.7	46.0	0.0	11.1	0.0
父	A小	38.6	0.0	4.3	1.4	38.7	0.0	5.3	0.0
	B小	26.0	0.0	16.4	1.4	34.7	0.0	8.0	1.3
	C小	32.3	0.0	6.5	1.1	33.0	0.0	5.0	1.0
	D小	29.5	0.0	9.0	0.0	39.0	0.0	3.7	0.0
	E中	37.5	0.0	12.5	1.0	39.4	0.0	10.6	0.0
	F中	44.2	0.0	14.0	2.3	42.2	0.0	4.4	2.2
	G中	34.1	0.0	13.6	0.0	28.3	0.0	10.9	0.0
全体		34.1	0.0	10.5	1.0	36.6	0.0	6.8	0.6

なり、他の子にあまりいい影響がない」（F中・男子・外国人の友人なし／親）

「学校へ行かないで遊んだり、又、物をとったりの姿を見て悪い影響を与えられるのではないか不安がある」（C小・女子・外国人の友人２人～／親）

「外国人の子供がいる事によって悪影響な事が沢山あります。タバコ、夜遊びの時間など」（F中・男子・外国人の友人２人～／親）

「外国人の子供は高校入試を考えていないので、自分の子供に自覚が出なくて困る」（E中・男子・外国人の友人２人～／父）

「外国人の文化をまね、ピアスをしたり派手な服装をしたりする（外国人の母親が日本人の小学6年の子供にピアスの穴を開けた事もある）」（E中・女子・外国人の友人なし／母）

しかも、外国人の「文化的差異」に対する父母の許容意識は、全体的には子どもの場合と類似しているものの、親子の類似関係を親子ペアの分析を通してみてみると、表3-39、表3-40のように、それぞれの家庭における親子の間に、多少のズレがあることも事実である。(3)

たしかに、掃除や給食の習慣の違いについては、父母ともに、親子の一致率はいずれの学年、学校、性別とも70%～80%台と高くなっている。外国人児童・生徒の友人数が違っても、その傾向に変わりはない。しかも、親子の一致のパターンは完全に外国人児童・生徒特有の掃除や給食の仕方を認めない方向を示している。

しかし、ピアスをつけることや学校へ来ないことに関しては、父母ともに、親子の間で異なる傾向が生じている。親の全体的な傾向と子どもの全体的な傾向は、すでに述べたようにほぼ同様な内容であったのに、親子ペアの分析を行うと親子の意識の一致率はかなり低下するのである。

たとえば、ピアスについては、親子の全体の一致率が、父母ともに40%前後にとどまっている。同時に、親子の意見が一致する場合にも、その方向性は一定でなく、肯定的一致率と否定的一致率がほぼ同率になっている。しかも、ピアスを「認めるべきだ」と「認めない方がよい」の両極端に親子の意見が分かれるのは、父母ともに全体として20%弱（父と子で17.2%、母と子で17.0%）である。むしろ、少なくとも親子の一方が「議論した方がよい」や「その他」という中間的な立場に立つ場合も目に付く。したがって、親子とも意見が分かれているが、その内実は、非容認派の親世代と容認派の子世代という形では単純に把握できないものになっていると理解する必要がある。親子ともピアスに関する意識は、多様になっており、しかもその多様性が、親子の間でも食い違いを見せるまでになっているのである。それだけ、ピアスに対する意識は変化しつつあり、流動的であるといいかえてもよい。その背後に、外国人児童・生徒のピアス問題だけでなく、日本人児童・生徒も含めた子どものピアス問題に関する世代間や親世代内における意識の差が存在していると考えられる。(4)

学校へ来なくてもよいという意識も、父母ともに、親子の一致率は全体として50%前後にとどまっている。しかも、子どもが中学生よりも小学生の方が高い一致率になっている。ただし、ピアスとは異なり、親子が一致するのは否定的一致率がほとんどである。また、「通うべき」と「通わなくて良い」の両極端に親子の意識が分かれるのは、ピアスの場合よりもずっと少なく、父母とも10%程度（父子：12.6%、母子：10.0%）である。したがって、親子の間で外国人児童・生徒が日本の学校に通うべきかどうかという点で意見が異なるのは、完全に否定するか議論の余地があるとする点で意見が分かれることによっていると考えられる。それゆえ、ピアスほど意見の多様性があるわけではないと見なしてもよい。

こうして、親子ペアの分析を行うと、ピアスや外国人が日本の学校へ通うことについては、親子の意識には多少のズレがある。それは、ピアス問題のように、世代間だけでなく、同一世代内の個人的な価値観の多様性や流動性、外国人が日本の学校へ通う問題のように、判断が難しいことによって生じている。したがって、それらは、必ずしも親子の固定的で決定的な意識の対立という意味をもってはいないといえる。

この点をふまえると、掃除や給食に関する親子の意識の強い類似性から見て、全体として、「文化的差異」に関しても親子の意識は類似する傾向があると見なすことができる。

表3-39　外国人児童・生徒の行動に対する父の許容意識　　単位：%

		ピアスをつけてもよい			掃除をしなくてもよい			学校へ来なくてもよい			給食は別献立の方がよい		
		親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率	親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率	親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率	親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率
学年性別	小5男	38.3	10.5	18.0	85.8	0.0	84.3	51.1	0.0	50.4	75.6	0.0	74.8
	小5女	45.9	22.3	12.7	88.6	0.0	88.6	57.4	1.9	50.3	71.7	0.0	69.8
	中2男	32.0	8.0	20.0	83.1	0.0	83.1	42.5	1.4	35.6	71.1	0.0	69.7
	中2女	34.0	17.9	11.3	89.8	0.0	88.9	36.4	4.7	27.1	75.9	0.0	75.0
外国友人	いない	41.0	10.5	21.9	80.4	0.0	80.4	43.9	1.9	39.3	71.3	0.0	69.4
	1人	40.8	21.1	11.8	85.7	0.0	85.7	55.4	2.7	45.9	71.8	0.0	71.8
	2人～	38.0	16.7	14.9	89.2	0.0	89.2	45.9	2.3	40.4	73.4	0.0	73.0
	5人～	31.0	13.8	6.9	93.2	0.0	89.8	56.9	0.0	53.4	84.7	0.0	81.4
学校別	A小	41.8	22.4	9.0	81.8	0.0	81.8	47.0	0.0	40.9	68.7	0.0	68.7
	B小	41.2	11.8	19.1	94.1	0.0	94.1	52.2	1.5	49.3	77.9	0.0	76.5
	C小	49.4	17.2	17.2	92.0	0.0	90.8	58.1	1.2	54.7	79.3	0.0	77.0
	D小	35.3	16.2	14.7	80.3	0.0	78.9	59.4	1.4	55.1	66.7	0.0	65.3
	E中	31.3	14.1	13.1	90.2	0.0	89.2	35.0	1.0	28.0	77.2	0.0	75.2
	F中	46.3	14.6	26.8	85.4	0.0	85.4	50.0	10.0	35.0	73.2	0.0	73.2
	G中	24.4	12.2	7.3	81.0	0.0	81.0	37.5	2.5	32.5	66.7	0.0	66.7
全体		38.9	15.7	15.1	87.2	0.0	86.6	48.5	1.9	42.7	73.6	0.0	72.4

表3-40　外国人児童・生徒の行動に対する母の許容意識　　単位：%

		ピアスをつけてもよい			掃除をしなくてもよい			学校へ来なくてもよい			給食は別献立の方がよい		
		親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率	親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率	親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率	親子一致率	肯定的一致率	否定的一致率
学年性別	小5男	40.0	13.6	21.4	85.3	0.0	84.6	61.7	0.0	60.3	74.8	0.0	74.1
	小5女	44.3	22.4	12.6	91.0	0.0	91.0	60.2	1.2	55.6	77.3	0.0	74.4
	中2男	41.7	8.3	25.0	80.0	0.0	78.8	40.2	0.0	36.6	77.4	0.0	76.2
	中2女	36.1	20.4	9.3	90.8	0.0	90.8	36.8	1.9	31.1	80.7	0.0	80.7
外国友人	いない	48.2	17.5	24.6	81.4	0.0	80.5	47.0	1.7	43.6	76.9	0.0	75.2
	1人	36.6	13.4	14.6	87.8	0.0	87.8	55.1	0.0	50.0	78.0	0.0	76.8
	2人～	39.7	18.4	15.0	89.5	0.0	89.5	53.0	0.9	49.1	74.6	0.0	73.3
	5人～	32.3	17.7	6.5	92.1	0.0	92.1	54.8	0.0	53.2	87.3	0.0	87.3
学校別	A小	38.4	19.2	11.0	84.9	0.0	84.9	52.1	0.0	47.9	71.6	0.0	68.9
	B小	36.1	15.3	16.7	91.7	0.0	91.7	57.1	1.4	55.7	77.8	0.0	76.4
	C小	49.5	15.5	21.6	91.8	0.0	91.8	65.3	0.0	61.1	80.2	0.0	78.1
	D小	43.1	25.0	15.3	84.6	0.0	83.3	67.6	1.4	64.9	74.0	0.0	72.7
	E中	38.2	15.7	14.7	88.5	0.0	88.5	34.7	1.0	29.7	82.5	0.0	81.6
	F中	47.7	18.2	18.2	84.1	0.0	84.1	44.2	2.3	37.2	77.3	0.0	77.3
	G中	30.4	10.9	17.4	82.6	0.0	80.4	40.9	0.0	38.6	73.9	0.0	73.9
全体		40.9	17.2	16.4	87.5	0.0	87.2	52.4	0.8	48.6	77.3	0.0	76.0

第6項　小　括

以上、子どもの外国人児童・生徒との交流に与える親の影響について見てきた。

その結果、親の社会経済的条件は子どもの外国人児童・生徒との交流のあり方にほとんど影響を与えていないことがわかった。子どもの外国人児童・生徒との交流のあり方は、親の学歴・階層・年収・居住年数によって説明することはできなかった。しかも、親の外国人との交流は子どもと異なり、きわめて希薄で、外国人との交流に関して、親の行動が子どもの行動に影響を与えるという事実も把握できなかった。親の社会経済的条件や外国人との交流のあり方と子ども同士の交流のあり方の間には、重要な関係は見られなかった。

その上、外国人一般に対する親の意識は、好意的なものはそれほど多くなかった。むしろ、「ルールを守らない」とか、「治安が乱れる、恐い」といったマイナスイメージで語られる場合が少なくなかった。それは、外国人児童・生徒に対する子どもの意識とは大きくかけ離れたものであった。

しかし、外国人児童・生徒に対しては、親の意識も子どもと類似し、好意的な受けとめ方をすることが

多かった。そのため、外国人一般に対する行動や意識と、外国人児童・生徒に対する意識は少なからず、「ねじれ」が生じているといえる。

これらの点をふまえると、親の日常的な外国人一般との交流や彼らに対する意識が子どもたちの外国人児童・生徒との交流や彼らに対する意識に影響を与えているのではなく、むしろ、子どもたちの外国人児童・生徒との交流や彼らに対する意識が親の外国人児童・生徒に対する意識に影響を与えていることが予測できる。

ただし、子どもたちの外国人児童・生徒との交流や意識は、親の外国人一般に対する行動や意識を変えるまでの影響力をもっていないことも事実である。それは、「学校に外国人がいるのはべつに良いと思う。男性の外人は少しこわいです。女性と子供は別にこわいとは思わないのですが!」（C小・女子・外国人の友人不明／母）という言葉に象徴的に示されている。子どもたちの外国人児童・生徒との交流や彼らに対する親子の意識の類似性は、外国人を見る場合、男性を中心にした大人と子どもを区別して把握する父母の意識を媒介にしているのである。いいかえれば、子どもたちの外国人児童・生徒との交流や意識のあり方は、外国人の子どもに対する父母の意識に影響を与えるが、外国人一般に対する父母の意識や行動に影響を与えるまでには至っていないといえる。

そこでは、むしろ「こわい」存在としての大人と「かわいそうな」存在としての子どもという外国人を世代によって区別して見つめる父母の意識が生み出されつつあるといってもよい。それは、「昼間、学校へ行ってない子供達をよく見ます。親に呼び寄せられて無理して日本にいてイヤな思いをしてかわいそうだと思う」（B小・男子・外国人の友人なし／母）、「学校へ行かずに自転車で町を走っている外国人の子をよく見ます。学校へ行かせないのであれば母国に置いてくるべきではないでしょうか。子供もかわいそうです」（F中・男子・外国人の友人１人／母）という言葉からもうかがえる。学校へ行っていない外国人の子どもがいたとしても、彼らを「問題のある子」や「こわい」存在としてではなく、「かわいそうな」存在として把握し、むしろそのような状態をもたらした親を問題視する意識が一部に生まれつつあるのである。

したがって、子どもたちの行動や意識は親の意識を変える力をもちうるが、それは、一方で、外国人の子どもに対する意識を変える段階にとどまり、他方で、世代によって区別した外国人に対する見方を生み出すという点で、今のところ限界をもっているとみなすことができる。逆にいえば、このような限界を越えたとき、子どもたちの行動や意識が親の意識を変える力は、より大きな意味をもつものとして機能するといえよう。

第４節　まとめ

以上、子どもと外国人児童・生徒との交流や意識と親の外国人に対する行動や意識について、いくつかの角度から検討してきた。そこで、以上で明らかになったことをまとめると、以下の如くなろう。

第一に、日本人の子どもの外国人児童・生徒との交流のあり方は、学年、性別による違いと同時に、学校のあり方に大きく左右されていることがわかった。日本人の子どもがどの程度外国人児童・生徒と友人関係を結ぶか、「教える」関係か「教わる」関係か、「日本語を学ぶこと」を外国人に要望するかどうか等の点は、小学生であるか中学生であるか、また学校に在籍する外国人児童・生徒の数や構成比と学校による外国人児童・生徒への教育や国際理解教育などの教育実践のあり方によって大きく異なっていた。学校に在籍する外国人児童・生徒の数が多く構成比が高い学校、そして外国人児童・生徒への教育や国際理解教育などの教育実践が積極的に展開されている学校では、外国人児童・生徒の友人をもつ日本人児童・生徒が多かった。また、多くの場合、外国人児童・生徒との関係は、小学生が「教える」関係、中学生が「教わる」関係になる傾向が強い中で、このような特徴をもつ学校ではむしろどちらの関係も存在した。そのため、同化志向とは異なり、コミュニケーションの手段として「日本語を学ぶ」ことを外国人児童・生徒に要望する日本人児童・生徒が多く見られた。こうした傾向がもっとも典型的に現れていたのが、大泉町の学校の中で外国人児童・生徒がもっとも多く、国際理解教育が積極的に展開されているB小であっ

た。その意味で、日本人の子どもの外国人児童・生徒との交流のあり方にとって、学校はきわめて重要な位置をしめているといえる。

第二に、外国人との交流のあり方を親子間で比較すると、親の交流の少なさと子どもの交流の多さが対照的な形で捉えられた。日系ブラジル人を中心にした外国人の急増によって、外国人と日本人のセグリゲート化が進展し、「ルールを守らない」点や「治安が乱れる、恐い」という点で外国人に対する不満や不信が親の中に少なからず存在した。そのため、職場や地域での交流だけでなく、子どもの教育を介した外国人児童・生徒の親との交流も少なかった。これに対し、日本人の子どもたちは、全体として親とは比べものにならないほど積極的に外国人児童・生徒と交流していた。しかも、外国人児童・生徒に対する見方や彼らと交流することに対する考え方も好意的であり、積極的であった。その点で、積極的に外国人の子どもと交流し好意的に接する子どもたちと、外国人とは交流せずむしろ彼らに対する不信感を強めている親たちとの違いは明確であった。

しかし、第三に、親の場合にも、外国人児童・生徒に対する見方や子どもが外国人児童・生徒と交流することに関する意識については、意外なほど類似していた。親は外国人と交流せず、彼らに対する不信感を増大させているにもかかわらず、外国人の子どもに対する見方や日本人の子どもが外国人と交流する点に対する親の考え方は、子どもと同様、好意的で積極的な傾向を示していた。そこには、外国人を見る際に、自らの意志で日本にやってきて、時に「ルールを守らず」「治安を乱す」「恐い」大人と彼らに選択の余地なくつれてこられ学校にきちんと通う子どもたちとを区別する考え方が存在している。その考え方は、外国人を「こわい」大人と「かわいそうな」子どもという形で世代的に区別して評価する意識さえ生み出している。

第四に、そうした考え方を生み出し支えているのは、学校におけるわが子の外国人児童・生徒と交流の体験であり、それを通じたわが子の外国人児童・生徒に対する見方であろう。なぜなら、外国人児童・生徒に対する親の意識は、彼ら自身の日常生活の体験の中では決して形成されえないような意識だからである。いいかえれば、親の外国人に対する意識は大人と子どもに対する意識が異なり、前者は自らの日常生活での体験に裏打ちされ、後者は自らの子どもの体験や意識から影響を受けていると考えられる。その意味で、子どもの外国人児童・生徒との交流や外国人児童・生徒に対する見方は、親によって規定されるより、むしろ外国人児童・生徒に対する親の意識に影響を与えているのが現実である。

第五に、子どもの外国人児童・生徒との交流の体験やそれを通じた外国人児童・生徒に対する見方は、二重の意味での生活共生の可能性をもっていると考えられる。なぜなら、一方で、子どもたちの体験や意識は、親の意識に影響を与え、彼らの外国人に対する接し方を変える力をもつ可能性があるからである。たしかに、今のところ、子どもたちの影響力は、外国人の子どもに対する親の見方に限定され、外国人の親子を区別して把握する親の意識を部分的に生み出している。しかし、それは、外国人の全面的な否定を押しとどめる上で、一定の力をもつ可能性も見落としてはならない。外国人の子どもだけでなく、外国人一般に対する親の見方を変更させる可能性も存在するからである。その意味で、子どもの体験や意識は、親の意識への影響を通して、地域社会における生活共生を作り上げる上で、大きな力を秘めているといえる。他方で、子どもたちの現在の体験や意識は、長期的な視点で見れば、将来的には現在セグリゲート化された状態を克服しコミュナルな生活共生の状態を構築する可能性をもっている。現時点では、学校という限定された空間を中心になりたつ関係が、子どもたちが成人し地域社会の中心的な担い手になる中で、地域社会全体に広がる展望を描くことができるということである。もちろん、こうした二重の可能性は、今後とも学校側が外国人児童・生徒を積極的に受け入れ、国際理解教育に力を入れることによって現実性に転化するものである。その意味で、この点からいっても、学校のもつ意味は大きいといわざるをえない。

こうして、日本人と外国人のセグリゲート化と日本人側の外国人に対する不信感の増大の中で、学校教育を通じた子どもたちの外国人児童・生徒と交流の体験は、現在の子どもたち自身にとっての意味だけでなく、地域社会にとってもきわめて重要な意義をもっている。したがって、この点をふまえ、学校での外国人に対する教育や国際理解教育の取り組みをより充実させていくことが必要になる。

［注］

(1)大泉町国際交流協会会長、Y氏の言葉（1998年4月に行った、聞き取り調査による）。なお、彼以外にも、何人かの人から同じような考え方が示された。

(2)「大泉警察署管内犯罪発生状況（平成9年中）」より。ただし、無免許運転だけは例外で、65.9%が外国人によるものとなっている。

(3)「文化的差異」に関する質問は、前述した外国人の存在の影響や外国人に対する要望に関する質問と形式が異なっている。後二者は、親子とも「まったくその通りだ」「どちらかといえばそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の四択で、「まったくその通りだ」「どちらかといえばそう思う」が肯定的、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」が否定的な回答として把握できる。これに対し、「文化的差異」に関する質問は、親子とも肯定—否定の選択肢の他に「議論した方がよい」「その他」の選択肢で答える形式になっている。したがって、この設問の場合、他の二つの設問の親子一致率とは単純に比較できないという特徴をもっている。

(4)ただし、G中では、父母ともピアスに関する認識の一致率が他の学校と比べ低いのが目に付く。しかも、容認派と非容認派のズレも大きく、父子間で36.6%、母子間で26.1%が意見の対立を示している。この点で、G中の場合には、親子間の軋轢が表面化する可能性があると考えられる。

（小内　透）